

上京遺跡・寺ノ内旧域 発掘調査報告書

2 0 2 2

株式会社 文化財サービス

例　言

- 1 本書は、京都市上京区寺之内通新町西入妙顯寺前町 515 番地 14 で実施した、上京遺跡・寺ノ内旧域の発掘調査成果報告書である。(京都市番号 21S097)
- 2 調査は、集合住宅建設に伴い実施した。
- 3 現地調査は、東京建物株式会社より株式会社文化財サービス(以下、「文化財サービス」という)に委託され、田邊 貴教・菅田 薫(文化財サービス)が担当した。
- 4 調査期間は令和4年1月5日～1月27日である。
- 5 調査面積は135 m²である。
- 6 本文・図中で使用した地図は、京都市発行の都市計画基本図(縮尺1:2,500)「船岡山」「相国寺」を調整して作成した。
- 7 本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高はT.P.(東京湾平均海面高度)である。
- 8 土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 9 本書の執筆は田邊が行い、編集は田邊、吉川 絵里(文化財サービス)が行った。
- 10 現地での記録写真撮影は田邊が行い、出土遺物の撮影は写房 楠華堂(内田 真紀子氏)に依頼した。
- 11 調査に係る資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 12 発掘調査および整理作業の参加者は、下記の通りである。

〔発掘調査〕 田中 慎一、小林 一浩、吉岡 創平、清須 慶太(以上、文化財サービス)、
作業員(株式会社京カンリ)

〔整理作業〕 望月 麻佑、多賀 摩耶、吉川 絵里、早見 由楓、森下 直子、場勝 由紀菜、
古谷 真由美、野地 ますみ、神野 いくみ、上野 恵己、甲田 春奈、下市 紗耶香、
内牧 明彦、溝川 珠樹、西尾 知子、若山 美帆、草野 善光
(以上、文化財サービス)
- 13 出土遺物の年代観は、平尾 政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年、中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社1995年に依った。
- 14 現地調査、整理作業において、下記の方から御教示をいただいた。記して感謝いたします。
(敬称略)

網 伸也(近畿大学)、木立 雅朗(立命館大学)、浜中 邦弘(同志社大学歴史資料館)

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 測量基準点の設置と地区割り	3
4 整理作業・報告書作成	3

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境	5
2 既往の調査	6

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序	8
2 検出遺構	8
(1) 第1面	11
(2) 第2面	18
(3) 第5層	30
3 出土遺物	32
(1) 第1面遺構出土遺物	32
(2) 第2面遺構出土遺物	39
第Ⅳ章まとめ	43

図版目次

図版 1 遺構	1. 調査地遠景（北から妙顯寺を望む）
	2. 第1面完掘状況（西から）
図版 2 遺構	1. 溝13完掘状況（東から）
	2. 溝13断面（攪乱部分・東から）
図版 3 遺構	1. 土坑02・20完掘状況（西から）
	2. 土坑02・20断面（西から）
図版 4 遺構	1. 第2面完掘状況（西から）
	2. 第2面完掘状況（上が南）
図版 5 遺構	1. 溝50・57・柱列86・87・88完掘状況（東から）
	2. 溝50・57・柱列86・87・88完掘状況（西から）

- 図版6 遺構 1. 溝50・57・柱穴72断面（西から）
2. 第5層完掘状況（西から）
- 図版7 遺物 1. 遺構検出中出土遺物（瓦質土器・奈良火鉢）
2. 土坑02・11・17・20・32出土遺物（土師器・皿）
- 図版8 遺物 1. 土坑21・32出土遺物（土師器・鍋 焼締陶器・甕）
2. 土坑21出土遺物（土師器・鍋）
- 図版9 遺物 1. 溝13出土遺物（土師器・皿）
2. 溝13出土遺物（青磁・皿 瓦質土器・鉢 施釉陶器・皿・天目茶碗
焼締陶器・すり鉢）
- 図版10 遺物 1. 溝13出土遺物（焼締陶器・壺 石鍋）
2. 風倒木痕・第4層内出土遺物（土師器・皿）
- 図版11 遺物 1. 土坑34・54・63・64・66出土遺物（土師器・皿・鍋 焼締陶器・甕）
2. 溝50・57出土遺物（土師器・皿・鍋 青磁・皿）
- 図版12 遺物 1. 柱穴38・42・56・76（柱列86）・柱穴75（柱列87）・柱穴72（柱列88）
出土遺物（土師器・皿・鍋 灰釉陶器・皿）
2. 柱穴29・31・46・49出土遺物（土師器・皿）

挿図目次

図1	調査地位置図（1：2500）	1
図2	調査経過写真	2
図3	基準点路線図（1：500）	4
図4	調査区地区割り・基準点配置図（1：150）	4
図5	調査地周辺復元図	5
図6	既往調査位置図（1：5000）	6
図7	調査区西壁・北壁断面図（1：80）	9
図8	調査区南壁断面図（1：80）	10
図9	第1面平面図（1：80）	12
図10	溝13平面・断面図（1：50）	16
図11	土坑02・20・21・32平面・断面図（1：50）	17
図12	第2面平面図（1：80）	19
図13	溝50・57・柱列86平面図（1：80）	21
図14	柱列87平面図（1：80）	23
図15	柱列88平面図（1：80）	24
図16	溝50・57・柱列86平面・断面図（1：50）	25
図17	柱列88平面・断面図（1：50）	26
図18	柱列89平面・断面図（1：50）	27

図19	柱穴35・46・49・土坑43・63・64平面・断面図（1：50）	28
図20	第5層完掘平面図（1：80）	31
図21	出土遺物1（1：4）	34
図22	出土遺物2（1：4）	36
図23	出土遺物3（1：4）	38
図24	出土遺物4（1：4）	40

表目次

表1	既往調査一覧表	7
表2	遺構概要表	8
表3	遺物概要表	32
表4	遺物観察表	45

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至る経緯（図1）

調査地は京都市上京区寺之内通新町西入妙顕寺前町 515 番地 14 に位置する。当地において東京建物株式会社が集合住宅建設を計画したため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）の指導により試掘調査が先行して行われた。その結果、室町時代の遺物を含む中世の整地層が確認されたことから、文化財保護課指導の下、株式会社文化財サービス（以下「文化財サービス」という）への委託による発掘調査が行われることとなった。

2 調査の経過（図2）

調査は2022年1月5日より現地作業に着手し、1月27日にすべての工程を終了した。調査区は文化財保護課により東西15m、南北9mで設定した。面積は135m²である。

調査は近現代の造成土と近世の整地土、および東側の近代以降の搅乱を重機にて除去し、その後人力により第1面の精査及び遺構検出を行った。その結果、近世の土坑と東西に延びる幅約1.2mの溝を検出した。東西溝からは16世紀後半頃の遺物が大量に出土した。第1面の記録作業実施後、試掘調査で第2面としている明黄褐色土の地山面まで人力で掘削した。結果、第1面で検出した東西溝と並行する形で布掘り状の溝の中に柱穴が並ぶ遺構を検出した。第2面の記録作業実施後、下層確認として調査区西側の黒褐色土層の掘削を行った。1月26日より埋め戻し作業を行い、1月27日に全ての作業を終了した。

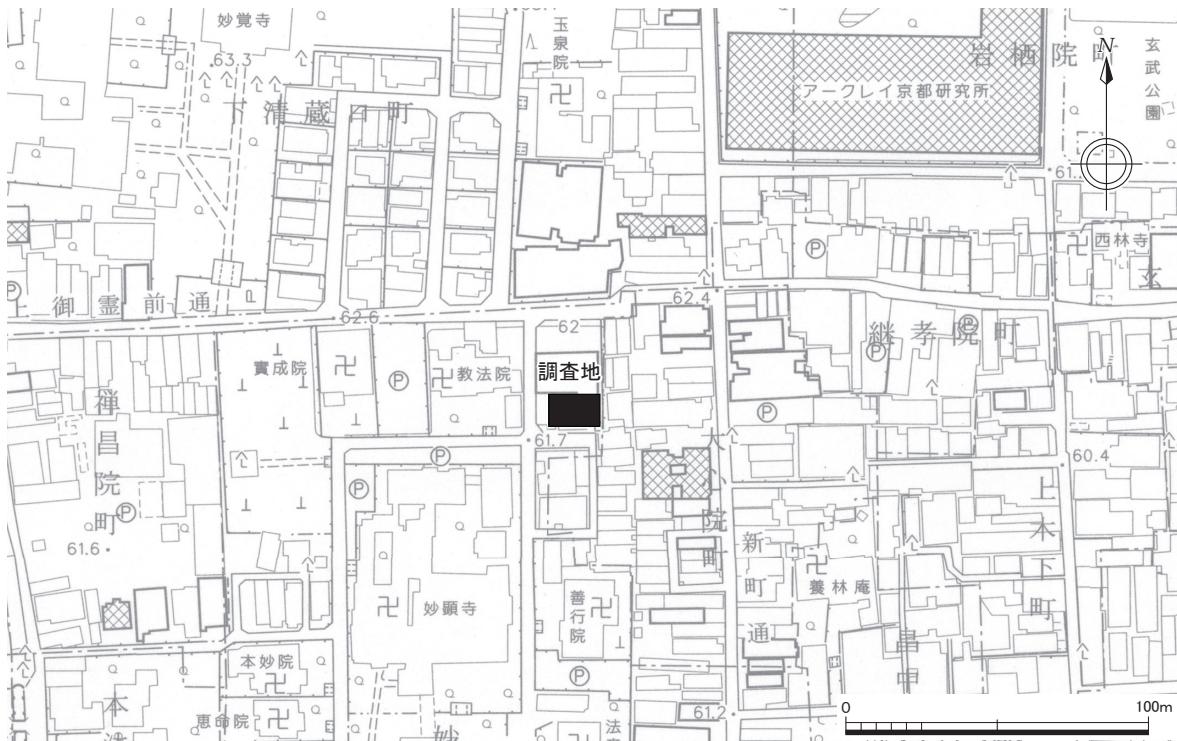


図1 調査地位置図 (1:2500)



1. 調査前（北から）



2. 重機掘削作業（南西から）



3. 遺構掘削作業（南西から）



4. 測量作業（北西から）



5. 浜中検証審査員の視察



6. 木立検証審査員の視察



7. 埋め戻し作業（南西から）



8. 調査完了後（北から）

図2 調査経過写真

なお、写真撮影機材は、35 mmフルサイズの一眼レフデジタルカメラ、35 mm白黒フィルムおよびカラーリバーサルフィルムを使用し、図面作成には手測りによる実測、トータルステーションによる図化、写真測量を併用した。

現地調査においては、適宜、文化財保護課の検査および指導を受けた。また、本調査の検証審査員である近畿大学教授網伸也氏、立命館大学教授木立雅朗氏、同志社大学歴史資料館准教授浜中邦弘氏の現地視察・検証を受け、調査に対する助言を頂いた。

3 測量基準点の設置と地区割り（図3・4）

測量基準点は、街区基準点である6B 026、6B 027の2点を用い、開放トラバース測量により調査地敷地外にT. 1を設置し、その2点からトータルステーションによりT. 2、T. 3を設置した。基準点測量の成果は以下の通りである。

6 B 026	X = -106,918.889 m	Y = -22,415.745 m	H = 62.208 m
6 B 027	X = -106,912.330 m	Y = -22,349.026 m	H = 62.050 m
T. 1	X = -106,955.838 m	Y = -22,352.051 m	H = 61.379 m
T. 2	X = -106,949.726 m	Y = -22,345.599 m	H = 61.619 m
T. 3	X = -106,941.995 m	Y = -22,327.682 m	H = 61.785 m

検出遺構および出土遺物の管理のため、調査区に対して3mグリッドを設定した。Y軸にアルファベットを西から東に、X軸にアラビア数字を北から南に順に付し、両者の組み合わせで地区名とした。

4 整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業および報告書作成を行った。整理作業は写真、図面の整理と出土遺物の整理を並行して実施した。遺物の整理は洗浄、接合、実測、トレース、復元、写真撮影を行った。報告書の執筆は調査を担当した田邊貴教、編集作業は吉川絵里が担当し、その他整理作業は当社社員が分担して行った。

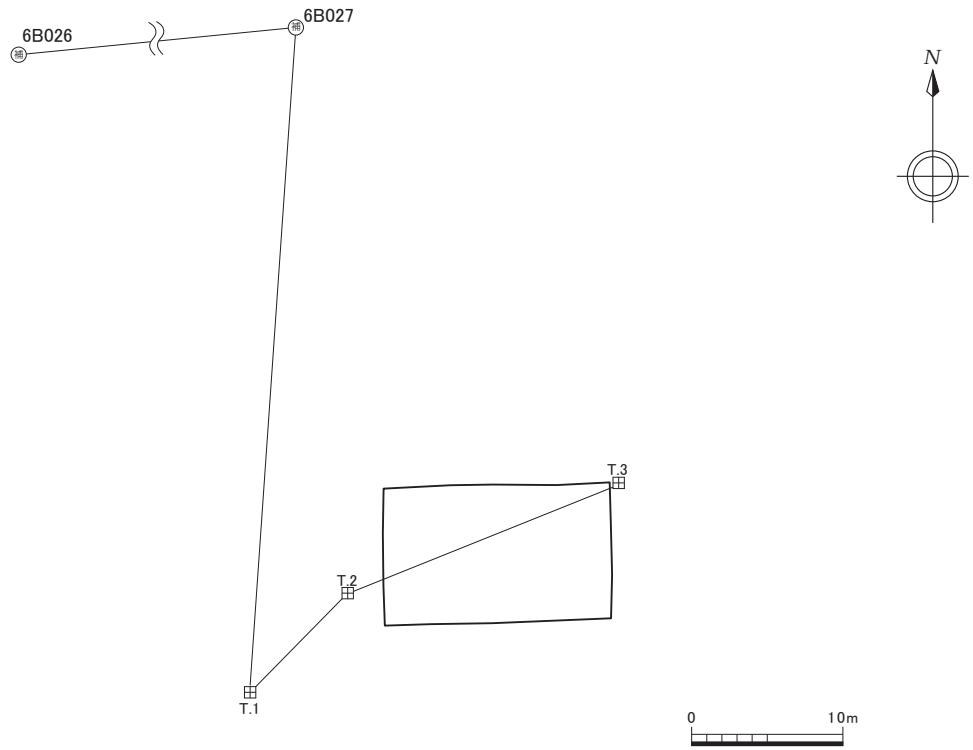


図3 基準点路線図 (1 : 500)

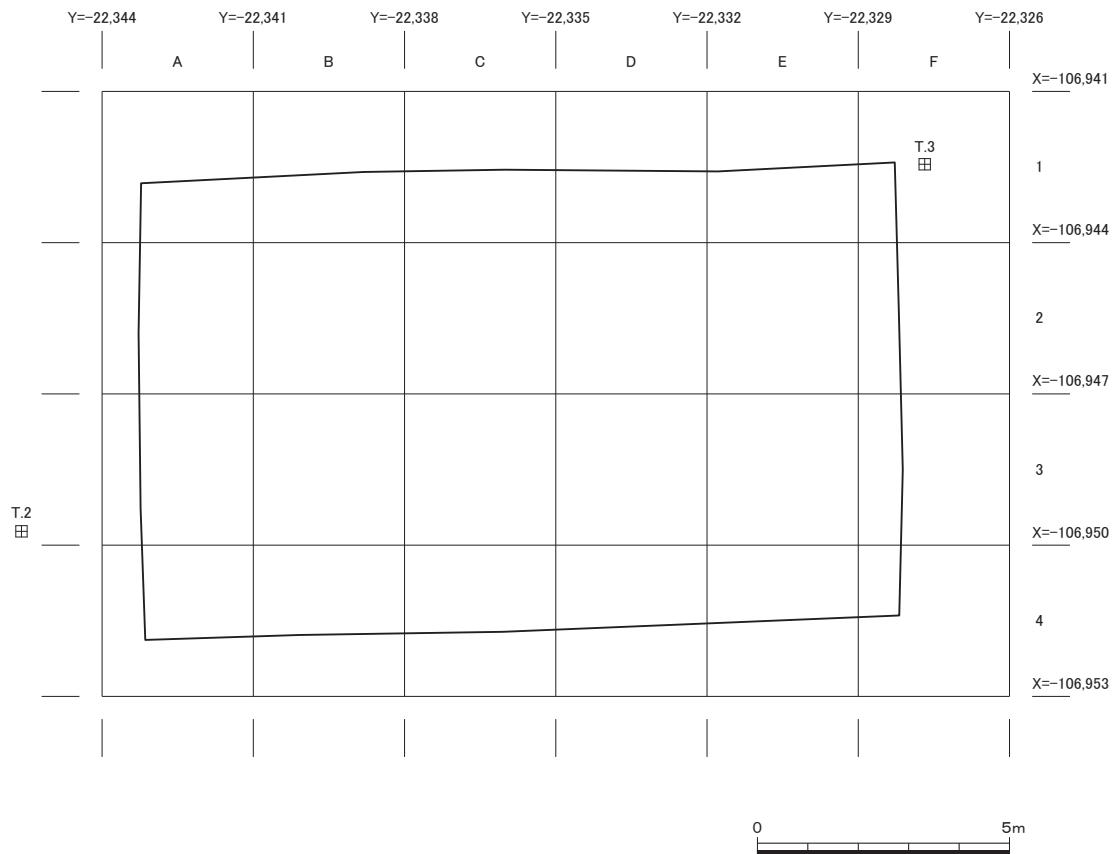


図4 調査区地区割り・基準点配置図 (1 : 150)

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境（図5）

調査地は上京遺跡と寺ノ内旧域に位置する。現在、調査地の南側には天正12（1584）年に豊臣秀吉が二条西洞院より移転させた妙顕寺が存在する。また西側には妙顕寺の塔頭である教法院が存在する。16世紀前半に描かれたとされる町田本『洛中洛外図屏風』によると、調査地の西側に室町幕府第11代將軍、足利義晴の邸宅であった柳原御所、細川京兆家の庶家である細川典厩邸、本家である細川京兆邸が並ぶ。また16世紀半ばに描かれたとされる上杉本『洛中洛外図屏風』では、柳原御所の跡地に禪昌院が建ち、南側には三好長慶邸が描かれている。いずれにせよ室町時代において当地は幕府の要職の邸宅が並ぶ重要な場所であったことは間違いない。本調査地には町田本、上杉本とも「大心院」が描かれており、調査に際しては、大心院の遺構が検出される可能性があること、その際の区画整理や整地の跡なども検出される可能性があることを考慮した。



図5 調査地周辺復元図（『京都時代MAP 安土桃山編』より引用・再作図）

参考文献

- 松岡 満『京都時代MAP 安土桃山編』 新創社 2006年
 国立歴史民俗博物館WEBギャラリー『洛中洛外図屏風（歴博甲本）』
 京都大学貴重資料デジタルアーカイブ『寛永度萬治前洛中絵図』

2 既往の調査（図6・表1）

本調査地の周辺では調査例が少なく、一番近い調査例は調査地から直線で南西に約200m離れた裏千家今日庵にて行われた調査である（調査2）。この調査では室町時代後期頃の南北溝、井戸、江戸時代の石室、井戸、埋納遺構を検出している。

調査1では、細川典厩邸の遺構と思われる室町時代後期の塀跡、柵列跡、井戸等を検出している。その他、周辺で試掘調査が行われているが、目立った遺構は確認されていない。

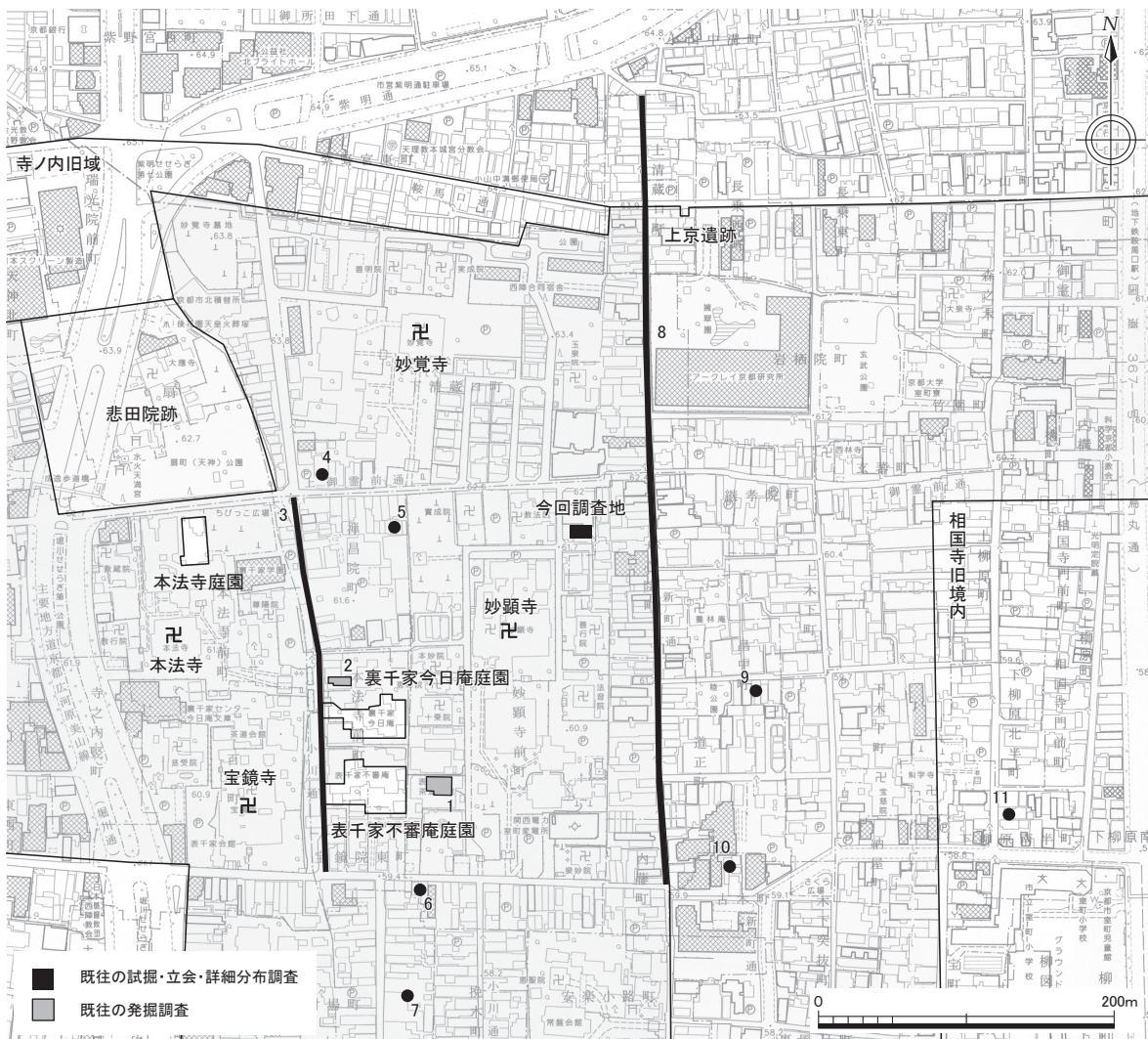


図6 既往調査位置図（1：5000）

表1 既往調査一覧表

	遺跡名	調査法	調査成果概要	掲載文献
1	上京遺跡・寺ノ内旧域 (表千家不審庵)	発掘	平安時代後期の溝、室町時代後期の細川典厩邸関連と考えられる柵列・堀・井戸・土坑・溝、江戸時代の土坑を検出。	『上京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-9 埋文研 2004年
2	上京遺跡・寺ノ内旧域 (裏千家今日庵)	発掘	室町時代後期の溝・井戸・土坑・ピット群、江戸時代の石室・石組構造・埋納土坑・井戸・土坑・柱穴・落込・ピットを検出。	『上京遺跡』『京都市内遺跡発掘調査報告 平成17年度』文化市民局 2006年
3	上京遺跡・寺ノ内旧域	詳細分布	GL-0.5m にて黒褐色礫混シルトの時期不明包含層、GL-1.1 ~ 1.5m にて地山である灰褐色砂礫層を検出。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成28年度』文化市民局 2017年
4	上京遺跡・寺ノ内旧域	詳細分布	GL-0.18m にて暗褐色礫混粘土質シルトの時期不明包含層、GL-0.37 ~ 2.05m にて地山である暗オリーブ褐色砂礫層を検出。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成28年度』文化市民局 2017年
5	上京遺跡・寺ノ内旧域	詳細分布	GL-1.13m にて地山である明褐色砂礫層を検出。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成29年度』文化市民局 2018年
6	上京遺跡・寺ノ内旧域	詳細分布	GL-0.19m にて黒褐色粘土質シルトの時期不明包含層を検出。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成28年度』文化市民局 2017年
7	上京遺跡・寺ノ内旧域	試掘	トレンチ①では GL-0.34m にて黒褐色泥砂の室町時代末期～安土桃山時代に属する遺物包含層、GL-0.82m にて黒褐色シルトの中世遺物包含層、GL-0.98m にて地山である黄橙色砂礫層を検出。トレンチ②では近世の土坑・ピット・包含層、GL-0.6m にて暗灰黄色泥砂の中世遺物包含層、GL-0.8m にて地山である黄橙色砂礫層を検出。トレンチ③では近世遺物包含層、GL-0.88m にて地山である黄橙色砂礫層を検出。	『上京遺跡・寺ノ内旧域』『京都市内遺跡試掘調査報告令和元年度』文化市民局 2020年
8	上京遺跡・寺ノ内旧域	立会	No.⑥地点にて GL-0.68m より江戸時代初期の包含層、No.⑪地点にて GL-0.45m より室町時代前期の包含層、No.⑭地点にて GL-0.66m より室町時代後期の包含層、No.⑮地点にて GL-0.7m より室町時代末期の包含層、No.⑯地点にて GL-0.8m より鎌倉時代前期～中期の包含層、No.⑰地点にて GL-1.2m より鎌倉時代中期の包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成16年度』文化市民局 2005年
9	上京遺跡	詳細分布	GL-0.45 ~ 0.78m にて黒色泥砂の時期不明包含層を検出。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成28年度』文化市民局 2017年
10	上京遺跡	立会	GL-0.1m にて江戸時代末期の包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成16年度』文化市民局 2005年
11	相国寺旧境内	立会	GL-0.8m にて江戸時代の包含層、GL-1.3m にて江戸時代初期の包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成18年度』文化市民局 2007年

埋文研→財団法人京都市埋蔵文化財研究所

文化市民局→京都市文化市民局

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序（図7・8）

基本層序は近現代の造成土から地山までを6層に区分した。

第1層は灰褐色シルトの近現代の造成層で、煉瓦片、瓦片等を多量に含む。また、調査区東側は近現代の造成により地山面まで大きく掘り込まれている。

第2層は近世後期～末期の整地層で、黒色シルトの土間と思われる層や、火災によるものか焼損した瓦を廃棄したと思われる明赤褐色シルトの焼土層がある。

第3層は灰黄褐色泥砂の近世の整地層である。第3層より近世の土坑がいくつか見られる。第3層は近世前期～中期頃と思われる。

第4層は灰黄褐色シルトの室町時代後期～末期頃の整地層である。この上面を第1面とした。

第5層は第6層上に堆積する黒褐色シルトの層である。遺物は含まず人為的な堆積の痕跡は見られないため、地山層が土壤化したか自然堆積の層と思われる。

第6層は明黄褐色の地山層である。礫層の上にシルト質の層が堆積する。この上面を第2面とした。

本調査では、文化財保護課による事前の試掘調査の結果とそれを踏まえた指導により、近世層である第3層までを重機により掘削し、第4層上面を第1面と設定して以下は人力による掘削で調査した。

2 検出遺構

今回の調査では、東西方向の大型溝と塙の基礎と推定される布掘り状の遺構、柱穴列、土坑等を確認した。

第1面は第4層の整地が行われた後の室町時代後期～末期頃（16世紀半ば～後半）、第2面は地山上面で遺構の構築が行われた室町時代後期頃（16世紀前半～半ば）と想定される。

第1面の遺構は天正12（1584）年豊臣秀吉による妙顯寺の移転に伴う整地により埋め立てられたと思われる。

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
江戸時代以降	土坑 05・12・16・19・30・32・77・90～92	
桃山時代初期～江戸時代初期	柱穴 53、風倒木痕	
室町時代後期～末期頃	土坑 02・15・20・21・32、溝 13	
室町時代後期	土坑 34・43・47・54・58・63・64・66、溝 50・57、柱列 86・87・88・89、柱穴 24・27・29・31・33・35・46・48・49・59～61・65・68・69・93	

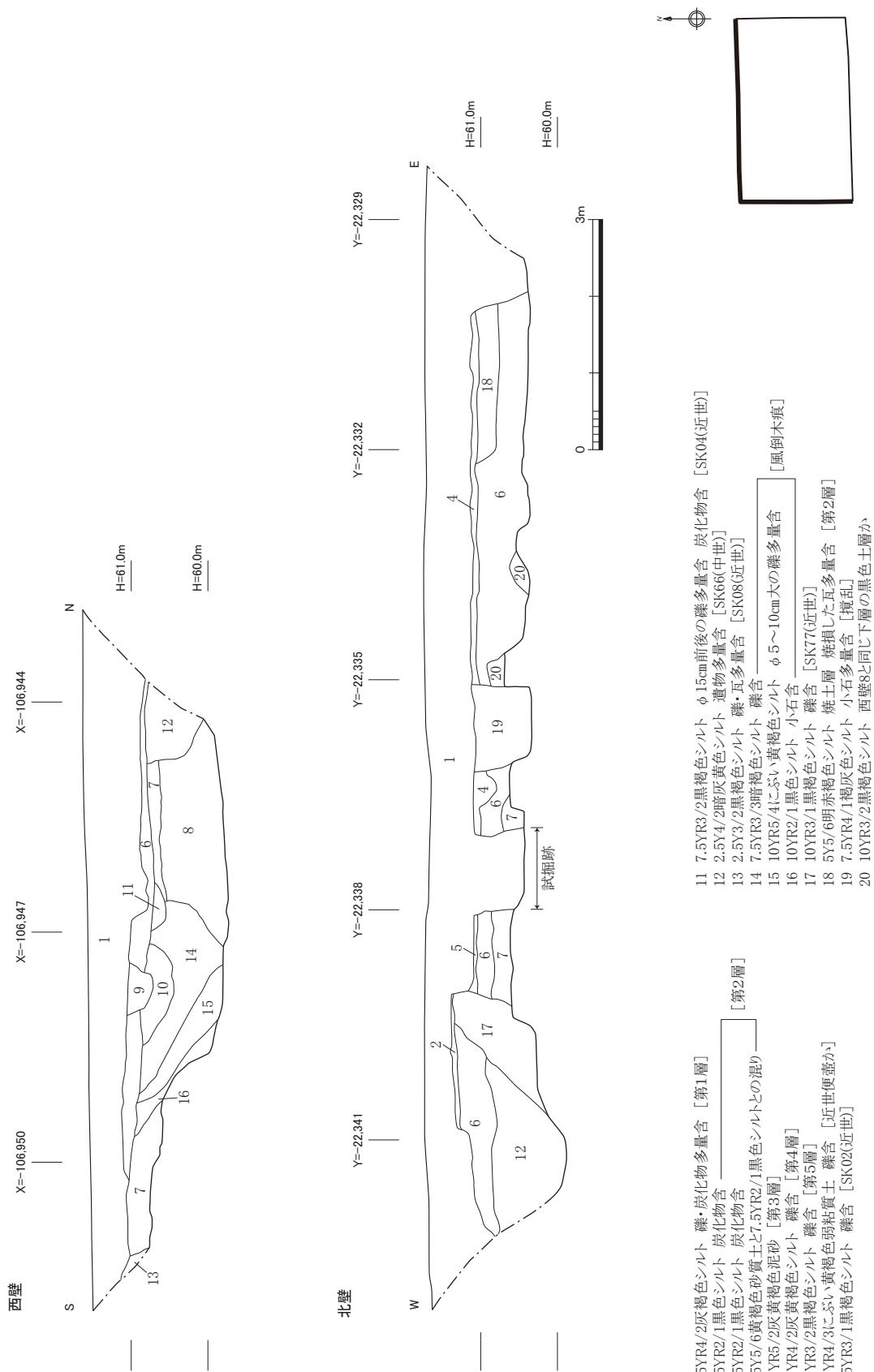


図7 調査区西壁・北壁断面図 (1:80)

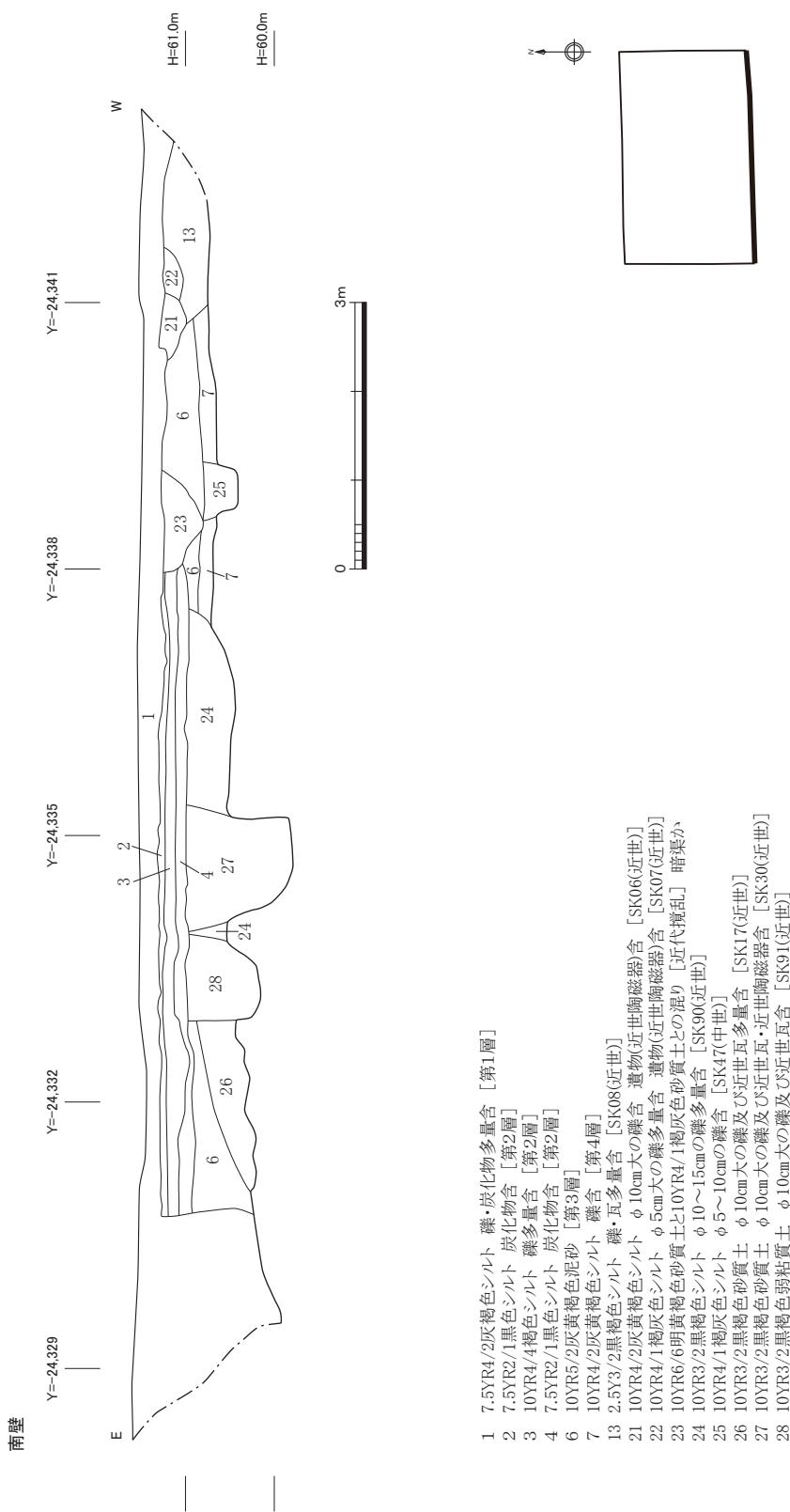


図8 調査区南壁断面図 (1 : 80)

(1) 第1面 (図9 図版1~3)

主な遺構として、近世の土坑、室町時代後期～末期頃（16世紀半ば～後半）の東西方向の大型の溝、土取り穴と思われる土坑を検出した。

〔土坑〕

多くが近世の廃棄土坑であるが、室町時代後半～末期頃の土取り用と考えられる土坑も検出している。

土坑02 (図9・11 図版3)

D2・E2区で検出した。検出時の規模は東西長2.7m、南北長約1.0m。深さは0.47mで、遺構は地山層まで掘削しており、底面はやや丸みを帯びた箱形である。埋土は灰黄褐色～黒褐色のシルトである。

遺物は16世紀後半頃の所産と考えられる土師器皿、土師器鍋、焼締陶器が出土しており、以降の遺物の出土は見られない。土坑の上面は近代以後の搅乱により大半が破壊されている。

土坑04 (図9)

A2区で検出した。検出時の規模は東西長0.25m、南北長約1.0m。深さは約0.3mで、底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色のシルトで0.1m大の礫を多く含む。近世の土坑である。

土坑05 (図9)

B2区で検出した。検出時の規模は東西長0.85m、南北長約0.8m。深さは0.2mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色のシルトであり、0.1～0.2m大の礫を多量に詰め込んでいる。近世の土坑である。

土坑06 (図9)

B4区で検出した。検出時の規模は東西長約0.5m、南北長0.25m。深さは約0.1mで底面は平坦である。埋土は灰黄褐色のシルトで、0.1m大の礫を含む。土坑07に切られている。土坑08と同一遺構と思われる。近世の土坑である。

遺物は19世紀頃の所産と考えられる近世陶磁器が出土している。

土坑07 (図9)

B4区で検出した。検出時の規模は東西長約0.6m、南北長約0.45m。深さは約0.4mで底面は丸みを帯びている。埋土は褐灰色のシルトで、0.1m大の礫を多く含む。土坑06と土坑08を切っている。近世の柱穴の可能性もある。

遺物は19世紀頃の所産と考えられる近世陶磁器、16世紀後半頃の所産と考えられる土師器皿が出土している。

土坑08 (図9)

B4区で検出した。検出時の規模は東西長約1.2m、南北長0.65m。深さは0.15mで底面は平坦である。埋土は灰黄褐色のシルトで、0.1m大の礫を含む。土坑06と同一遺構と思われる。近世の土坑である。

遺物は19世紀頃の所産と考えられる近世陶磁器、土師器皿の小片が出土している。

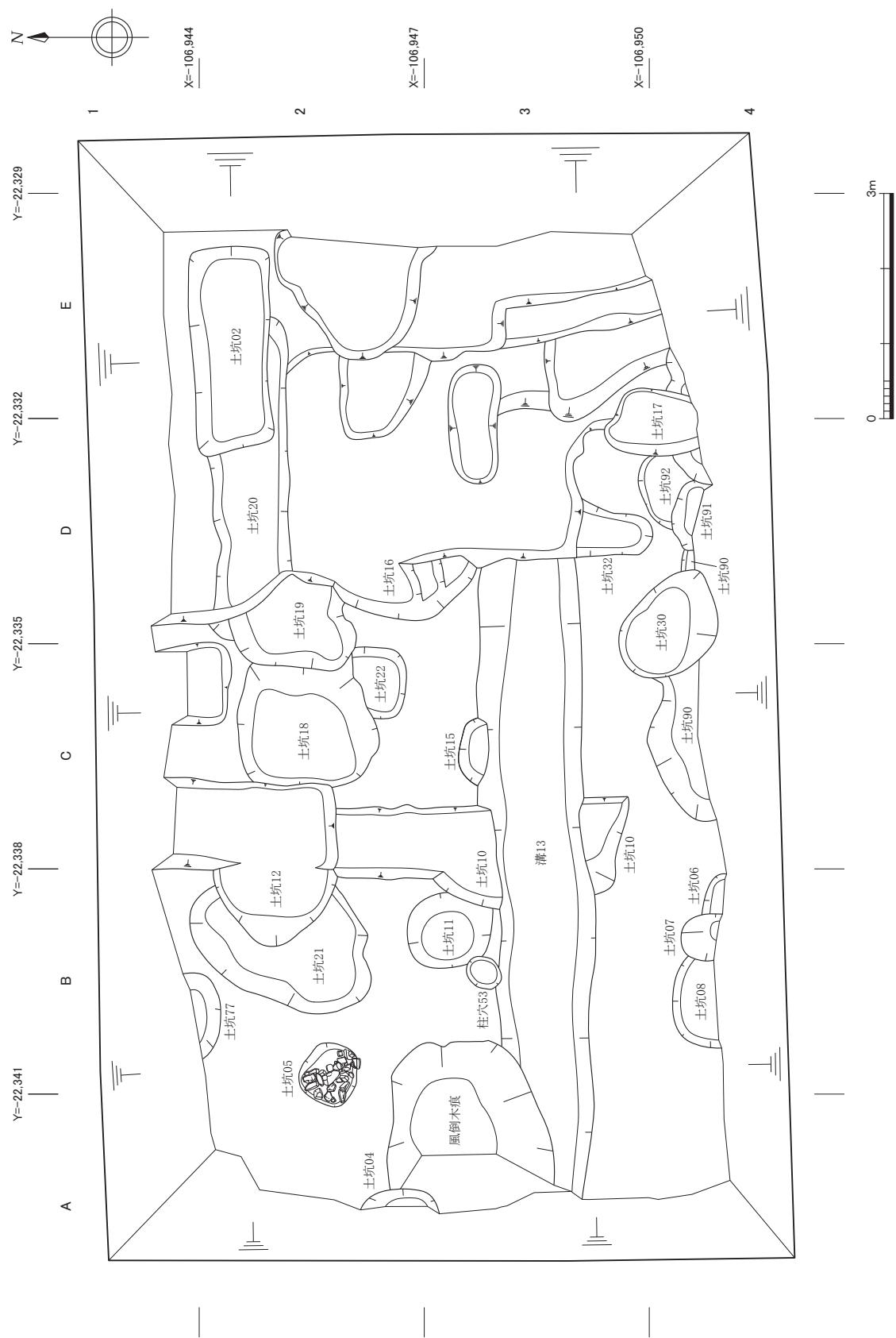


図9 第1面平面図 (1 : 80)

土坑10（図9）

B 3区で検出した。検出時の規模は東西長約1.3m、南北長約2.6m。深さは0.13mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色のシルトで礫を含む。溝13が埋められた後に掘られたものと思われる。

遺物は16世紀後半頃の所産と考えられる土師器皿、土師器鍋、焼締陶器が出土している。

土坑11（図9）

B 2・B 3区で検出した。検出時の規模は東西長約1.0m、南北長約1.1m。深さは0.35mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色のシルトである。

遺物は16世紀後半頃の所産と考えられる土師器皿、土師器鍋が出土した。

土坑12（図9）

B 2区で検出した。検出時の規模は東西長約1.0m、南北長約1.6m。深さは0.25mで底面は丸みを帯びており、地山層まで達している。埋土は黒褐色の弱粘質土で、0.1m～0.2mの礫を多量に含む。近世の土坑である。

遺物は19世紀頃の所産と考えられる近世陶磁器、16世紀後半頃の所産と考えられる土師器皿が出土した。

土坑15（図9）

C 3区で検出した。検出時の規模は東西長約0.9m、南北長約0.4m。深さは0.15mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色のシルト。溝13に切られているため、第1面の整地層である第4層が形成された後、溝13が造られるまでに掘られたものと思われる。

遺物は16世紀後半頃の所産と考えられる土師器皿が出土した。

土坑16（図9）

D 2・D 3区で検出した。検出時の規模は東西長約0.8m、南北長約1.9m。深さは約0.4mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色土シルトである。近世の土坑である。

遺物は19世紀頃の所産と考えられる染付椀、土師器皿の小片、焼締陶器片が出土した。

土坑17（図9）

D 4・E 4区で検出した。検出時の規模は東西長約1.8m、南北長約0.4m。深さは約0.35mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色の砂質土で、近世瓦を大量に含む。

遺物は19世紀頃の所産と考えられる染付椀、土師器皿、施釉陶器が出土した。

土坑18（図9）

C 2区で検出した。検出時の規模は東西長約1.6m、南北約1.9m。深さは約0.4mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。土坑19に切られている。近世の土坑である。

遺物は19世紀頃の所産と考えられる染付椀、近世の軒丸瓦、近世陶磁器、16世紀後半頃の所産と考えられる土師器皿、土師器鍋が出土した。

土坑19（図9）

C 2・D 2区で検出した。検出時の規模は東西長0.6m、南北長約0.8m。深さは約0.4mで底面

は丸みを帶びている。埋土は黒褐色シルトで礫を含む。土坑18を切っている。近世の土坑である。

遺物は19世紀頃の所産と考えられる近世の磚瓦、染付椀、近世陶磁器、16世紀後半頃の所産と考えられる土師器皿、土師器鍋が出土した。

土坑20（図9・11 図版3）

D2・E2区で検出した。検出時の規模は東西長約4.3m、南北長約1.0m。深さは約0.2mで底面はやや丸みを帶びた箱形である。遺構は地山層まで掘削しており、断面形は底面が曲線である。土坑20は土坑02によって切られている。破壊を免れている西端部分を確認すると、室町時代後期～末期頃と推定される第4層の整地層を切り込んでいることから、土坑20と土坑02は、室町時代末期頃（16世紀後半）に土取りの目的等、何らかの目的で掘削が行われたと思われ、また断面では土坑02と土坑20に切り合いが見られず、溝13と同じく土坑20と土坑02は天正12年の秀吉による妙顕寺移転の際の整地により同時に埋め立てられたものと思われる。

遺物は16世紀後半頃の所産と考えられる土師器皿、焼締陶器が出土した。

土坑21（図9・11）

B2区で検出した。検出時の規模は東西長約1.6m、南北長約2.2m。深さは0.15mで底面は平坦である。埋土は黒褐色シルトで礫を含む。土坑12に切られている。妙顕寺移転時に穴を掘り、そこに一括で廃棄をしたと思われる。2面目検出時に1面検出時よりも規模が拡大することが判明したため、2面目検出時の状態を採用した。

遺物は16世紀後半～末頃の所産と考えられる土師器鍋がコンテナ1箱分出土した。

土坑22（図9）

C2区で検出した。検出時の規模は東西長約0.95m、南北長約0.75m。深さは約0.15mで底面は丸みを帶びている。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。土坑18と土坑19に切られている。

遺物の出土はなかった。

土坑30（図9）

C3・C4・D3・D4区で検出した。検出時の規模は東西長約1.4m南北長約1.3m。深さは約0.9mで底面は平坦である。埋土は黒褐色弱砂質土で礫を多く含む。土坑88を切っている。形状と深さから近世の井戸跡の可能性はあるが、石組み等は見られず、掘り方も砂質と礫でもろい。第2面の検出時で確認をした遺構だが、近世の遺構のため第1面の遺構として扱う。

遺物は19世紀頃の所産と考えられる染付椀、近世陶磁器、近世瓦が出土した。

土坑32（図9）

D3区で検出した。検出時の規模は東西長約0.8m、南北長約1.0m。深さは約0.3mで底面は丸みを帶びている。埋土は黒褐色シルトで、10～15cmの礫を含む。土坑32の北側は近代の搅乱により破壊されているため、溝13との前後関係は不明であるが、出土遺物から溝13と同時期まで存在し埋められたものと推測される。第2面の検出時で確認した遺構だが、溝13と同時期の埋没と考えられるため、第1面の遺構とした。

遺物は16世紀後半頃の所産と考えられる土師器皿、焼締陶器が出土した。

土坑77（図9）

B 2区で検出した。検出時の規模は東西長1.15m、南北長約0.5m。深さは約0.3mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトで礫を含む。第2面の検出時で確認をした遺構だが、近世の遺構のため第1面の遺構として扱う。

遺物は19世紀頃の所産と考えられる近世瓦が出土した。

土坑90（図8）

C 4・D 4区で検出した。検出時の規模は東西長約3.6m、南北長約0.8m。深さは約0.3mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトで10~15cmの礫を多く含む。土坑30に切られている。第2面の検出時で確認をした遺構だが、近世の遺構のため第1面の遺構として扱う。

遺物は19世紀頃の所産と考えられる近世瓦が出土した。

土坑91（図9）

D 4区で検出した。検出時の規模は東西長約0.9m、南北長約0.3m。深さは約0.4mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色弱粘質土で10cm大の礫を含む。土坑90を切っている。第2面の検出時で確認をした遺構だが、近世の遺構のため第1面の遺構として扱う。

遺物は19世紀頃の所産と考えられる近世瓦が出土した。

土坑92（図9）

D 4区で検出した。検出時の規模は東西長約1.0m、南北長約0.45m。深さは約0.1mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。土坑17、土坑89に切られている。第2面の検出時で確認をした遺構だが、近世の遺構と思われるため、第1面の遺構として扱う。

遺物の出土はなかった。

〔溝〕

東西に延びる室町時代後期～末期頃（16世紀半ば～後半）の大型の溝を検出した。

溝13（図9・10 図版2）

A 3～D 3区で検出した。検出時の規模は東西長8.55m、南北長約1.4m。深さは約0.4mで底面は平坦の箱型であり、東へ向かうに従い徐々に浅くなる。東側1/3は近代の搅乱で消滅し、西側も秀吉の整地以降の風倒木痕で破壊されている。遺構は地山層まで掘削しており、断面形は底面が平らな箱形である。天正12（1584）年、秀吉による妙顯寺の移転に伴う整地で埋め立てられたものと思われる。

遺物の出土は、16世紀後半頃の所産と考えられる土師器皿、焼締陶器壺、瓦質土器鉢、施釉陶器皿・椀、石鍋が出土した。土師器皿はコンテナ2箱分の量に及ぶ。

〔柱穴〕

柱穴53（図9）

B 3区で検出した。検出時の規模は東西長約0.4m、南北長0.45m。深さは約0.1mで埋土は黒褐色シルト。溝13を切っていることから、溝13が廃絶して埋められた後に掘られたものと思われる。

遺物の出土はなかった。

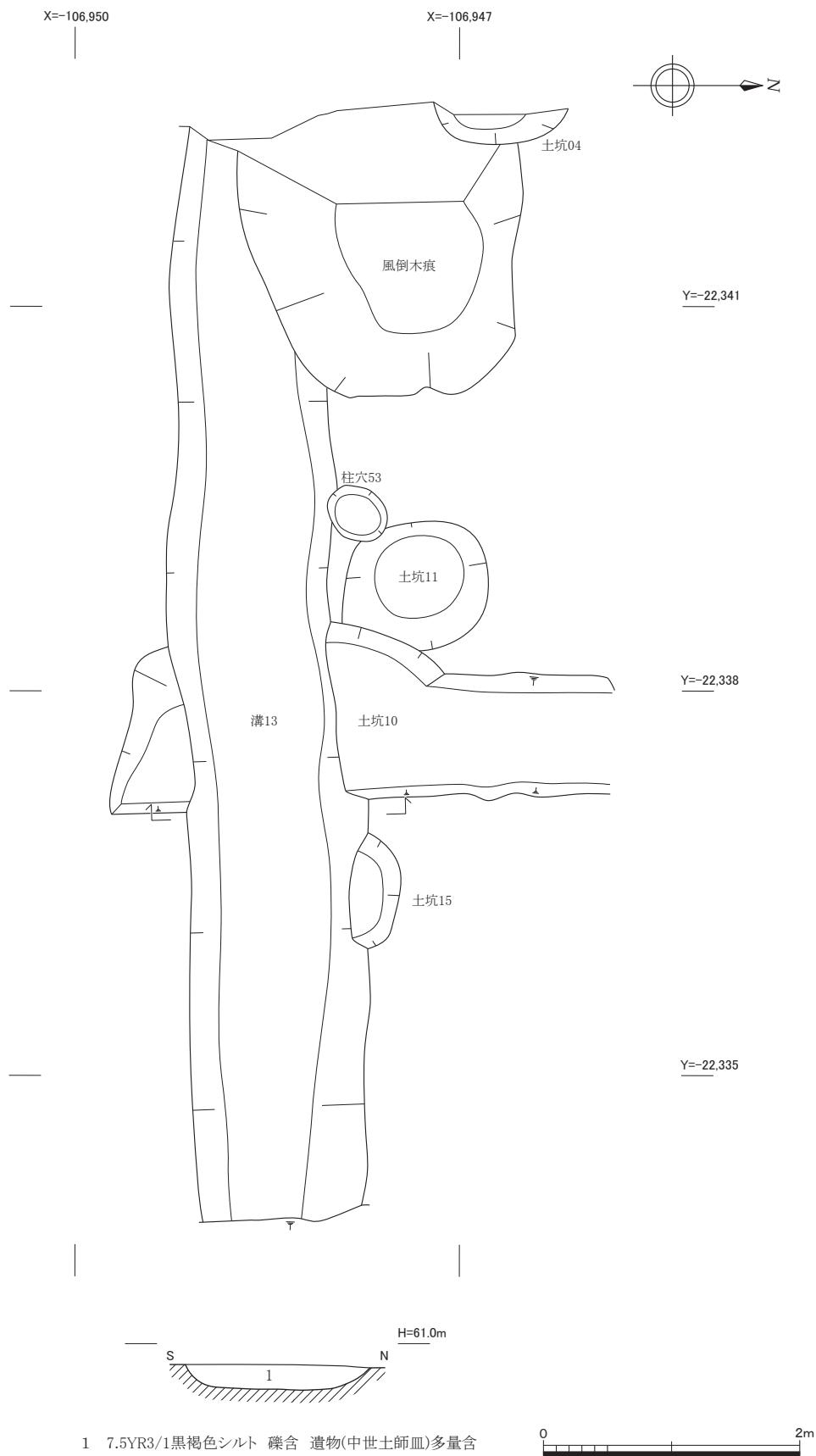


図10 溝13平面・断面図 (1:50)

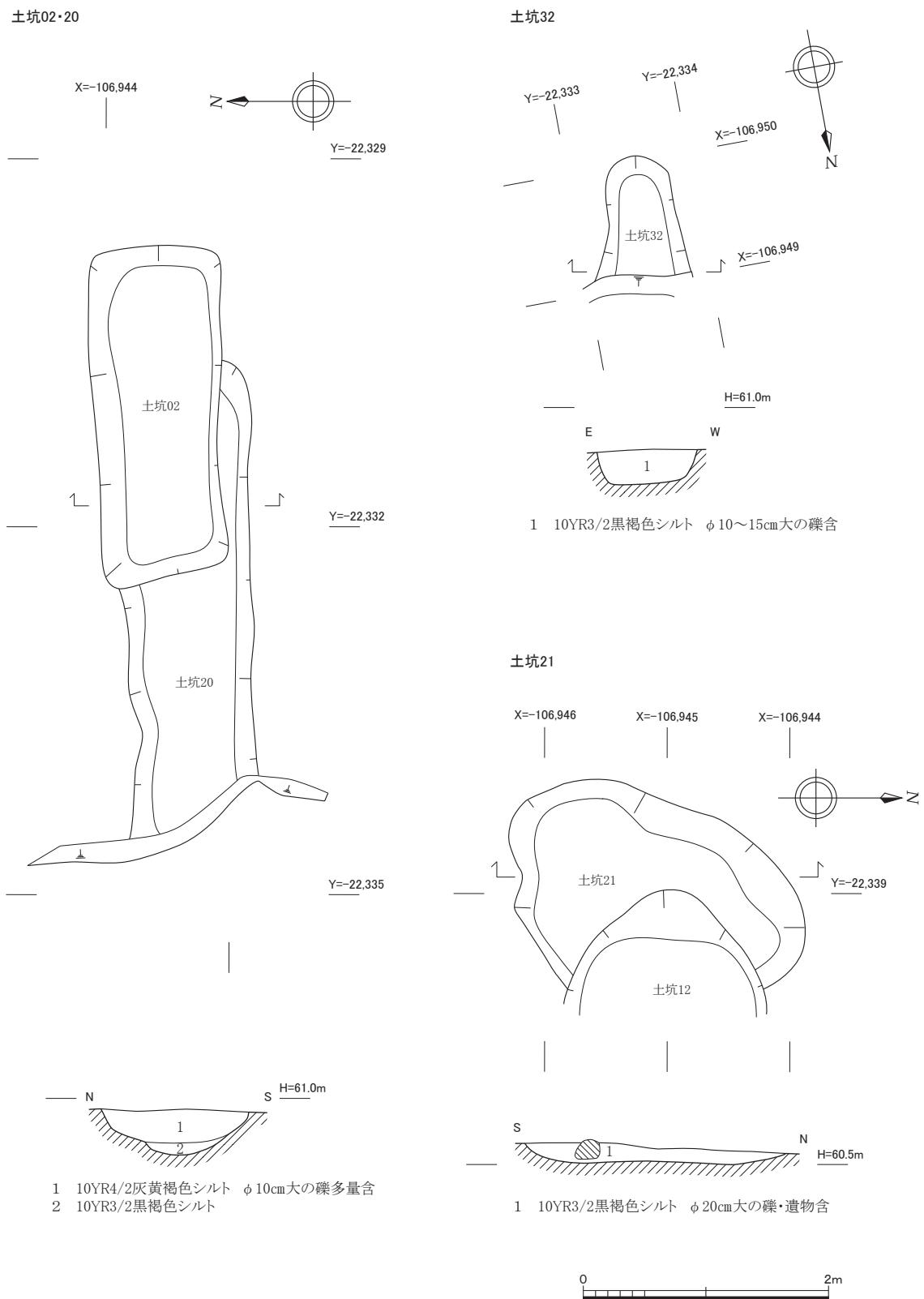


図11 土坑02・20・21・32平面・断面図 (1 : 50)

〔樹根穴〕

風倒木痕 (図7・9)

A2・A3・B2・B3区で検出した。検出時の規模は東西長19.5m、南北長約2.2m。深さは約0.7mで底面は丸みを帯びている。断面には根元から倒れた際に巻き込んだと思われる礫や小石を多量に含む。検出した面は第2面であったが、溝13を切り込んでいることが判明したため、第1面の遺構とする。

溝13への切り込みの状況も考慮すると、妙顕寺移転の際の整地により溝13が埋め立てられたあと、庭木の目的か樹木の植穴が掘られ、植樹されたものと思われる。植樹の際、溝13か第1面の整地層である第4層の遺物を含む土をそのまま使用して埋め、時期を置かず樹木が倒れそのまま根穴は埋められたものと思われる。

出土遺物としては、溝13の混入遺物である16世紀後半頃の所産と考えられる土師器皿・鍋が出土した。出土遺物等から桃山時代初期～江戸時代初期までに掘られたものと思われる。

(2) 第2面 (図12 図版4～6-1)

主な遺構として布掘り状の基礎遺構、柱穴群、柱列、溝、土坑を検出した。

〔土坑〕

いずれも不定形の室町時代の土坑で、性格は不明である。

土坑34 (図12)

D3・D4・E3・E4で検出した。検出時の規模は東西長0.65m、南北長約0.85m。深さは約0.1mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルト。

遺物は16世紀半ば～後半頃の所産と考えられる土師器皿が出土した。

土坑43 (図12)

D1・D2区で検出した。検出時の規模は東西長0.85m、南北長約0.5m。深さは約0.4mで底面は平坦である。埋土は黒褐色シルトで礫を多く含む。

遺物の出土はなかった。

土坑47 (図12)

B4区で検出した。検出時の規模は東西長0.65m、南北長約0.4m。深さは約0.3mで底面は丸みを帯びている。埋土は褐灰色シルトで5～10cmの礫を含む。柱穴の可能性もある。

遺物の出土はなかった。

土坑54 (図12)

B3区で検出した。検出時の規模は東西長約0.8m、南北長約0.3m。深さは0.15mで底面は平坦である。埋土は灰黄褐色シルトで礫を含む。第1面の溝13に切られている。

遺物は16世紀半ば～後半頃の所産と考えられる土師器皿・鍋が出土した。

土坑58 (図12)

B2区で検出した。検出時の規模は東西長約0.7m、南北長0.65mの不定形な形状。深さは

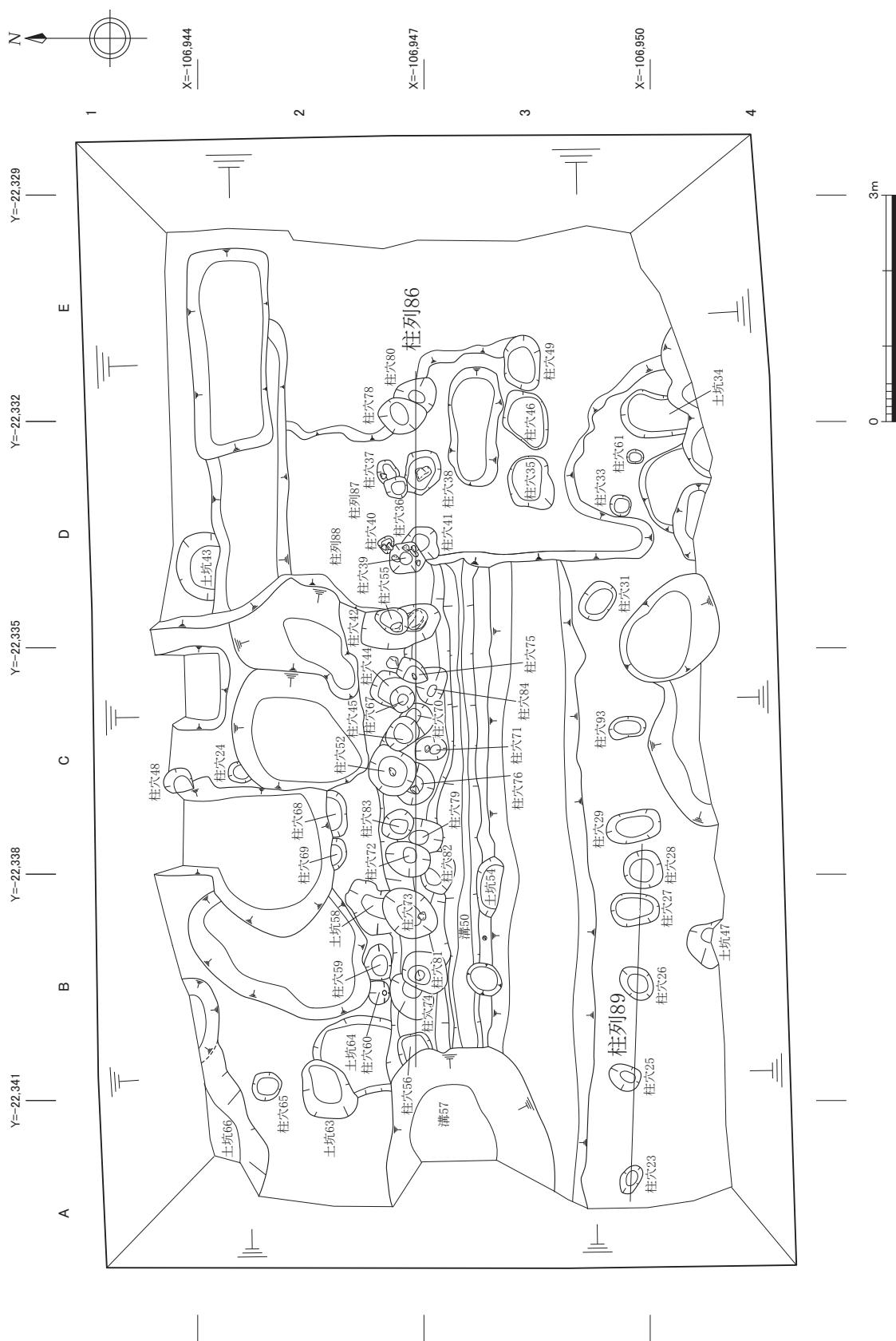


図12 第2面平面図 (1:80)

0.25 mで底面は丸みを帶びている。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。溝57に付随する柱穴73に切られているため、それ以前の遺構と思われるが詳細は不明である。

遺物は土師器皿の小片が出土した。

土坑63 (図12・19)

B 2区で検出した。検出時の規模は東西長約0.8 m、南北長約0.7 m。深さは0.16 mで底面は丸みを帶びている。埋土は黄褐色シルトで、小石を多量に含む。土坑64を切っている。

遺物は16世紀半ば～後半頃の所産と考えられる土師器皿の小片、土師器鍋、焼締陶器甕が出土した。

土坑64 (図12・19)

B 2区で検出した。検出時の規模は東西長約1.0 m、南北長約0.8 m。深さは0.26 mで底面は丸みを帶びている。埋土は褐灰色シルトで小石を多く含む。土坑63に切られている。

遺物は16世紀半ば～後半頃の所産と考えられる土師器皿の小片が出土した。

土坑66 (図7・12)

A 2区で検出した。検出時の規模は東西長約2.1 m、南北長約0.7 m。深さは約0.4 mで底面は丸みを帶びている。埋土は暗灰黄色シルト。

遺物は16世紀半ば～後半頃の所産と考えられる土師器鍋が出土した。

〔溝〕

東西に延びる室町時代後期頃（16世紀前半～半ば）と思われる溝を2本検出した。

溝50 (図13・16 図版5・6-1)

B 3～D 3区で検出した。検出時の規模は東西長約6.4 m、南北長約0.4 m。深さは約0.2 mで底面は丸みを帶びている。埋土は褐灰色シルトで5 cm大の礫を含む。溝50は後述の溝57と並行であり、時期差もほぼ見られないことから、溝57と関連する遺構と思われる。

遺物は16世紀前半～半ば頃の所産と考えられる土師器皿が出土した。

溝57 (図13・16 図版5・6-1)

B 2～D 2・B 3～D 3区で検出した。検出時の規模は東西長約6.9 m、南北長約0.8 m。深さは約0.2 mで底面は丸みを帶びている。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。溝57の底部には後述する柱列86があり、溝57の底部に約1.0 m間隔で並ぶように掘られているため、溝57と柱列86は一連の遺構と思われ、堀等を構築する際に溝を掘り、その底部に柱穴を掘り、柱を建てて基礎とした布堀り状の基礎と思われる。

遺物は16世紀半ば頃の所産と考えられる土師器皿・鍋・青磁皿が出土した。

〔柱列〕

東西方向の3本を検出した。

柱列86 (図13・16 図版5)

B 2～E 2・B 3～E 3区で溝57の底面に並ぶ形で検出した。西から柱穴56・74・73・79・76・70・42・41・38・80からなる。うち、柱穴41・38・80は近代の搅乱により上部が失われ、付随す

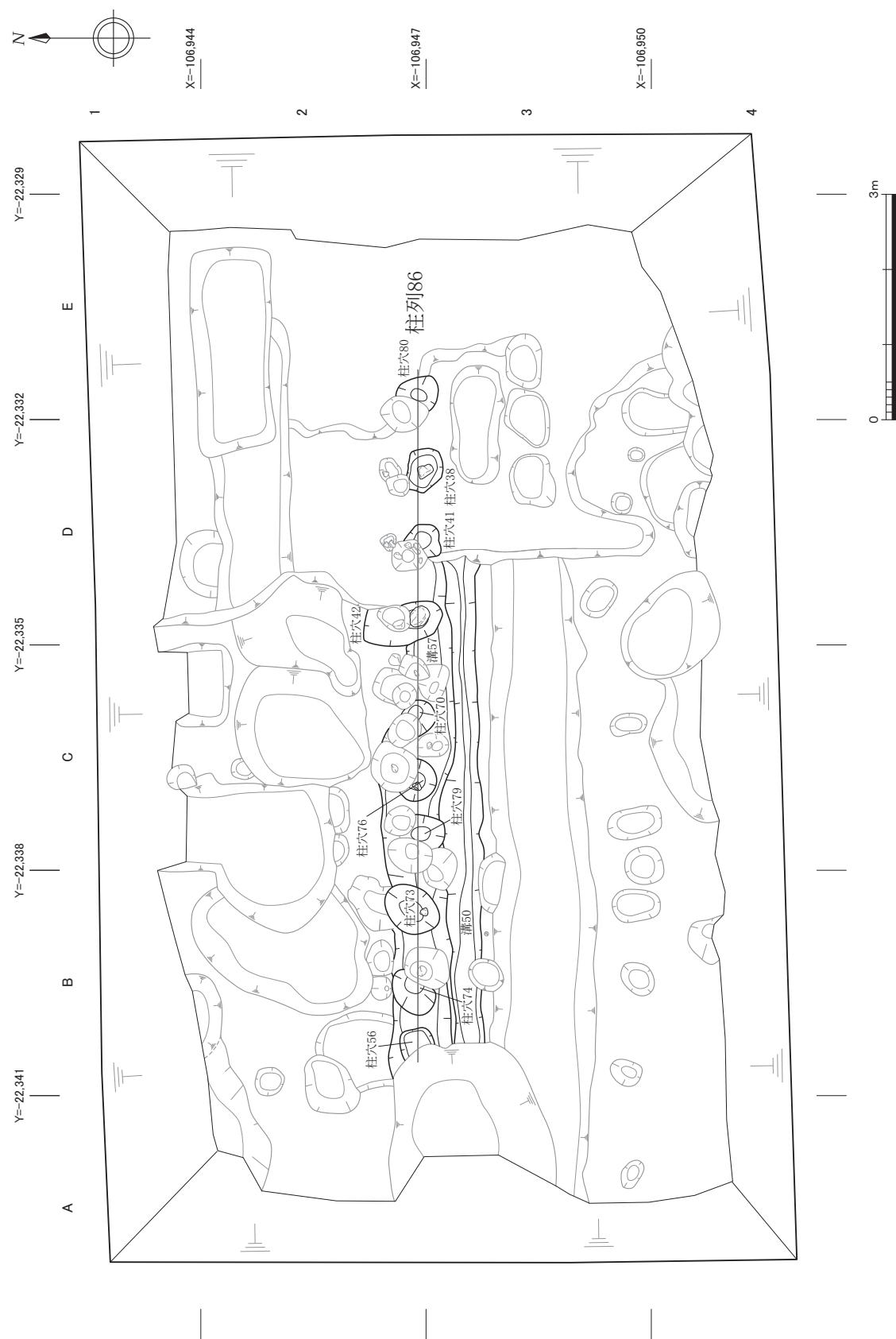


図13 溝50・57・柱列86平面図（1:80）

る溝57も失われている。

検出時のそれぞれの柱穴の規模は、柱穴56が東西長約0.4m、南北長0.45m。深さは0.15m。柱穴74が東西長約0.6m、南北長約0.6m。深さは0.25m。柱穴73が東西長0.6m、南北長約0.7m。深さは約0.3m。柱穴79が東西長0.45m、南北長約0.6m。深さは0.55m。柱穴76が東西長約0.55m、南北長約0.2m。深さは約0.3m。柱穴70が東西長約0.5m、南北長0.45m。深さは約0.3m。柱穴42が東西長約0.6m、南北長約1.0m。深さは約0.3mで、底面に根石と思われる石を据える。北側に掘り方が大きく広がり、抜き取り穴の可能性がある。柱穴41が東西長約0.4m、南北長約0.5m。深さは約0.2m。柱穴38が東西長約0.6m、南北長約0.5m。深さは約0.3mで、底面に根石と思われる石を据える。柱穴80が東西長0.45m、南北長0.55m。深さは約0.3m。

埋土は柱穴38・41・56・70・73・74・80が黒褐色シルトで礫を含む。柱穴42・76・79が褐灰色シルトで礫を含む。それぞれの柱間は芯心で約0.8m～1.0mである。

遺物は柱穴38・42で土師器皿の小片、土師器鍋、柱穴56で土師器皿の小片、灰釉陶器皿、柱穴76で土師器皿の小片、土師器鍋が出土した。土師器はいずれも16世紀半ば～後半頃、灰釉陶器皿は10世紀頃の所産と考えられる

柱列87 (図14 図版5)

B 2～E 2・B 3～E 3区で検出した。溝57および柱列86を切る形で、さらに柱列87の柱穴自身もそれぞれ切り合っている。柱列87は西から柱穴82・83・52・71・67・44・84・75・39・40・36・37・78からなる。

検出時のそれぞれの柱穴の規模は、柱穴82が東西長0.55m、南北長0.45m。深さは0.25m。柱穴83が東西長0.4m、南北長0.4m。深さは0.35m。柱穴52が東西長約0.7m、南北長約0.65m。深さは約0.3m。柱穴71が東西長約0.3m、南北長約0.4m。深さは0.2m。柱穴44が東西長0.45m、南北長約0.4m。深さは約0.35m。柱穴67が東西長0.35m、南北長約0.3m。深さは約0.3m。柱穴84が東西長0.5m、南北長約0.4m。深さは約0.4m。柱穴75が東西長約0.3m、南北長約0.4m。深さは約0.3m。柱穴39が東西長約0.4m、南北長約0.5m。深さは約0.3m。柱穴40が東西長約0.2m、南北長約0.2m。深さは0.05m。柱穴36が東西長約0.3m、南北長約0.3m。深さは0.15m。柱穴37が東西長約0.25m、南北長約0.3m。深さが0.1m。柱穴78が東西長約0.5m、南北長0.65m。深さは0.35m。

埋土はいずれも黒褐色シルト。柱列87の柱穴群は溝57と柱列86の後に作り替えられた掘立柱の壠の柱穴と思われ、2回ほどの建て直しがあると思われるが、柱の並びは確定できなかった。

遺物は柱穴75で16世紀半ば～後半頃の所産と考えられる土師器皿が出土した。

柱列88 (図15・17 図版5)

B 2～D 2・B 3区で検出した。柱列87を切っている。柱列88は西から柱穴81・72・45・55からなる。検出時のそれぞれの柱穴の規模は、柱穴81が0.55m、南北長約0.6m。深さは約0.5mで底面に根石と思われる石が据えられている。柱穴72が東西長0.45m、南北長約0.6m。深さは0.45m。柱穴45が東西長0.45m、南北長0.45m。深さは約0.3m。柱穴56が東西長0.35m、南北長0.45m。



図14 柱列87平面図 (1:80)

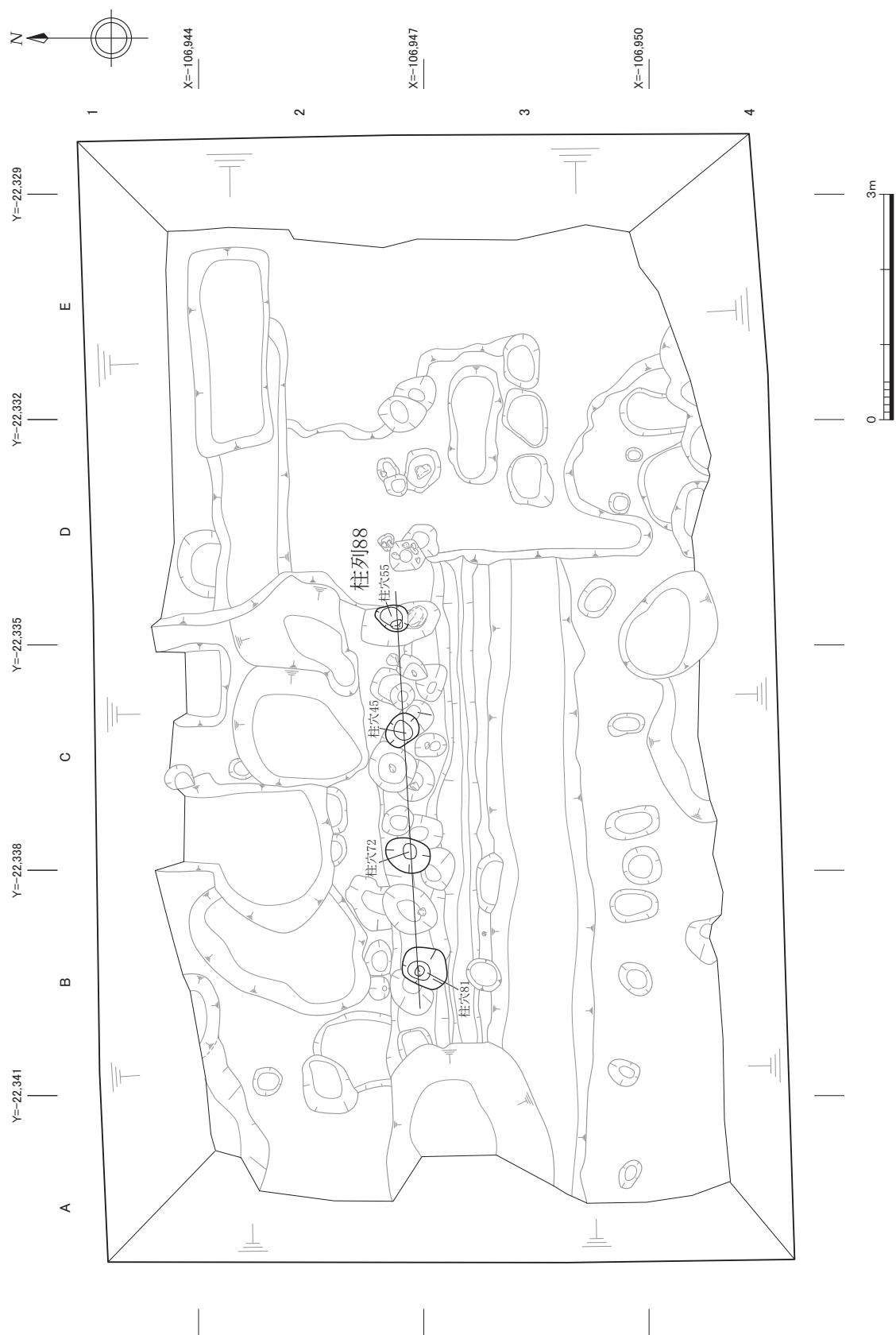
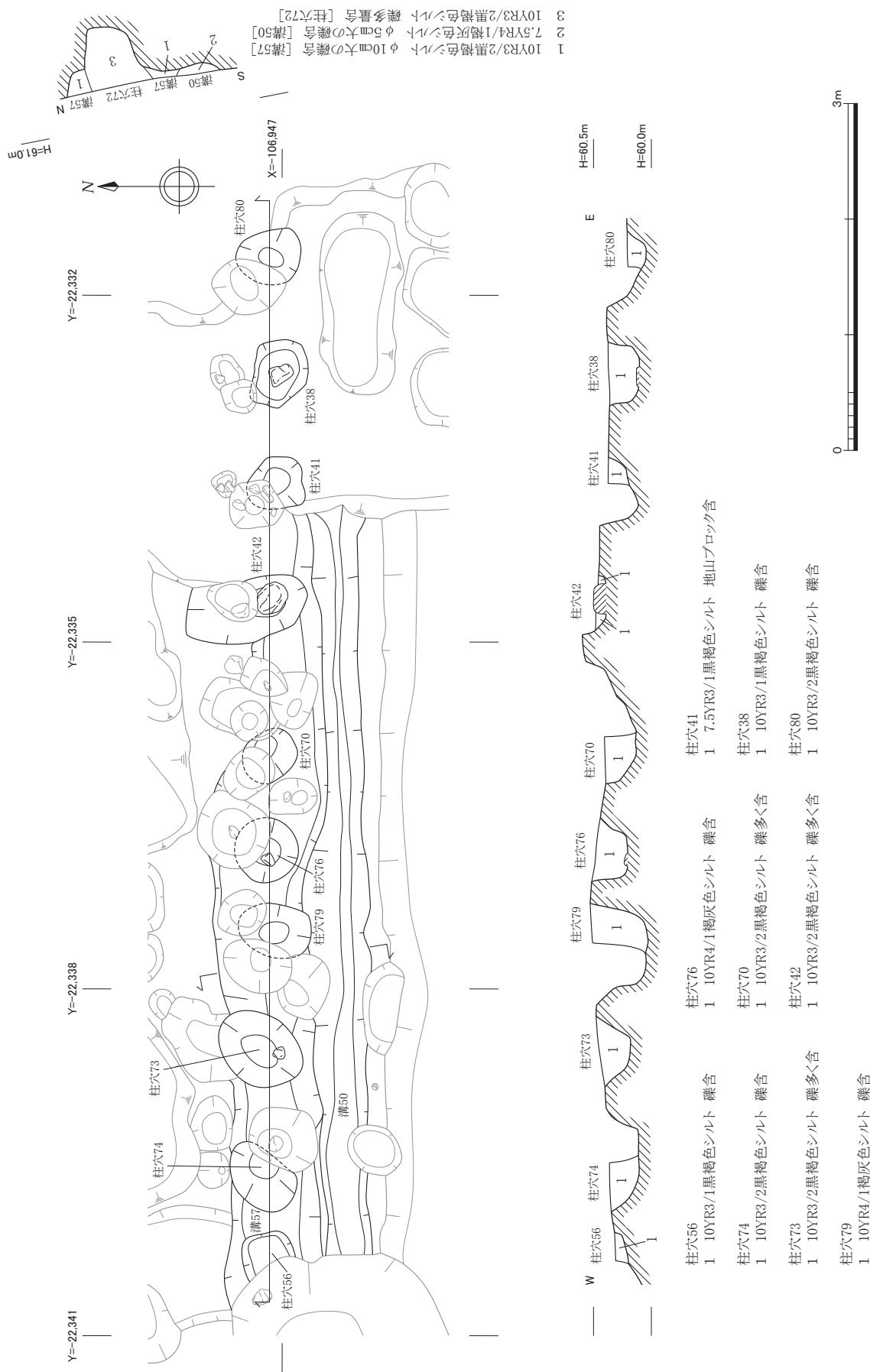


図15 柱列88平面図 (1 : 80)



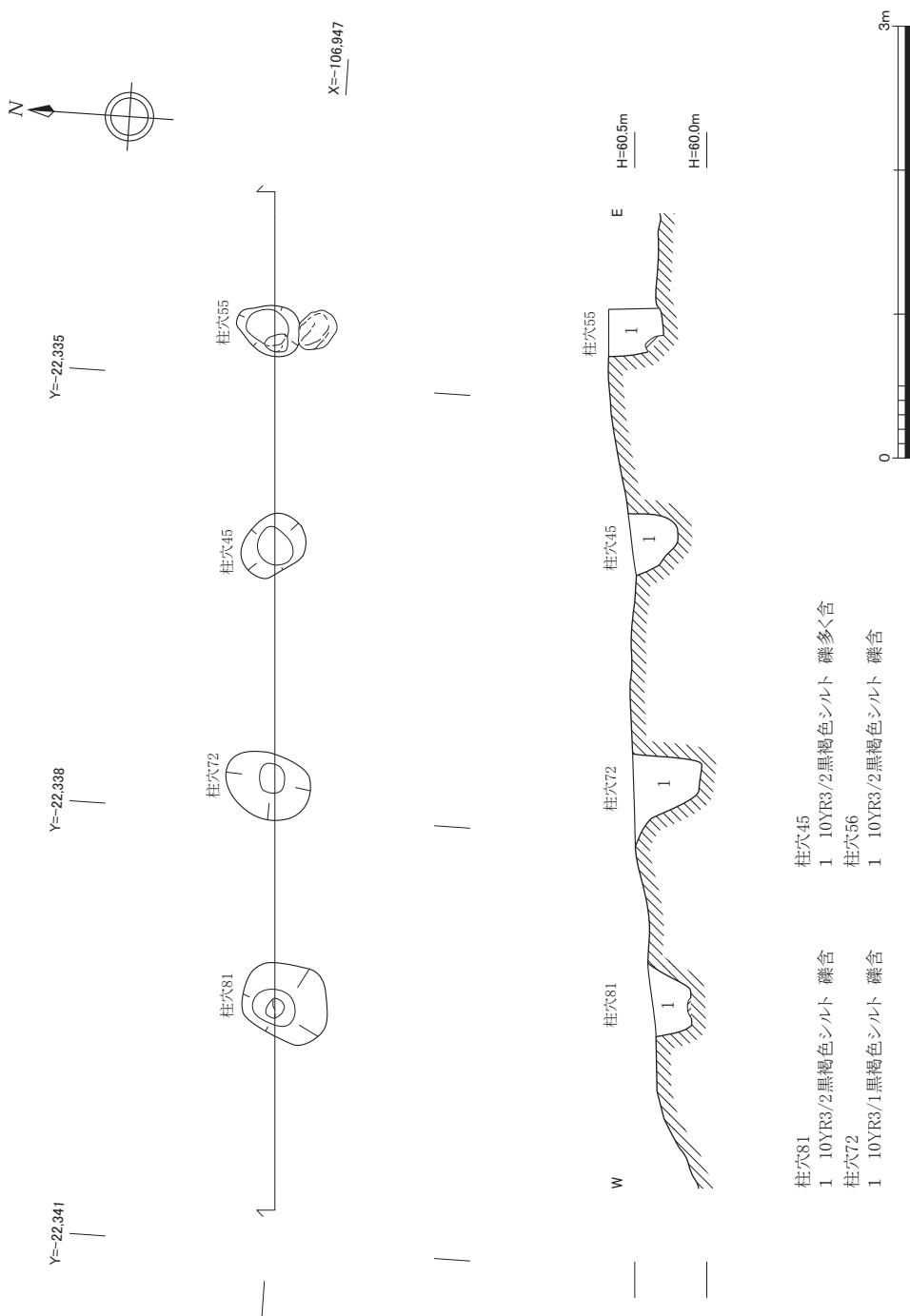


図17 柱列88平面・断面図 (1:50)

深さは約0.1m。埋土はいずれも黒褐色シルト。柱間は芯心で約1.6mである。

柱列88は溝57・柱列86の後に作られた掘立柱塀の柱列87と同じものと思われるが、柱列87の柱穴群を切っており、何度か建て替えられた後、最終的に作られた掘立柱塀とした。

遺物は柱穴72から16世紀半ば～後半頃の所産と考えられる土師器皿・土師器鍋が出土した。

柱列89（図18）

A 3～C 3区で検出した。柱列89は西から柱穴23、25、26、28からなる。検出時のそれぞれの柱穴の規模は、柱穴23が東西長0.35m、南北長約0.3m。深さは約0.1m。柱穴25が東西長0.35m、南北長約0.4m。深さは0.05m。柱穴26が東西長0.45m、南北長0.45m。深さは約0.1m。柱穴28が東西長約0.5m、南北長約0.5m。深さは約0.1m。埋土は柱穴23、25、26が黒褐色シルト、柱穴28が黄灰色シルトで礫を含む。柱間は芯心で1.3m～1.5mである。第1面の層である第4層の下より検出したため、第2面の遺構とした。柱穴の規模は小さく浅いことから、簡素な掘立柱の塀だった可能性がある。

遺物の出土はなかった。

柱穴35・46・49（図19）

D 3・E 3区で検出した。検出時のそれぞれの柱穴の規模は、柱穴35が東西長約0.7m、南北長約0.6m。深さは約0.1m。柱穴46が東西長約0.8m、南北長約0.6m。深さは約0.1m。柱穴49は東西長0.75m、南北長約0.45m。深さは約0.1m。埋土は柱穴35と46が黒褐色シルトで小石を含む。柱穴49が灰黄褐色シルトで礫を含む。柱穴35・46・49は東西方向に同軸上に並び、さらに溝13の

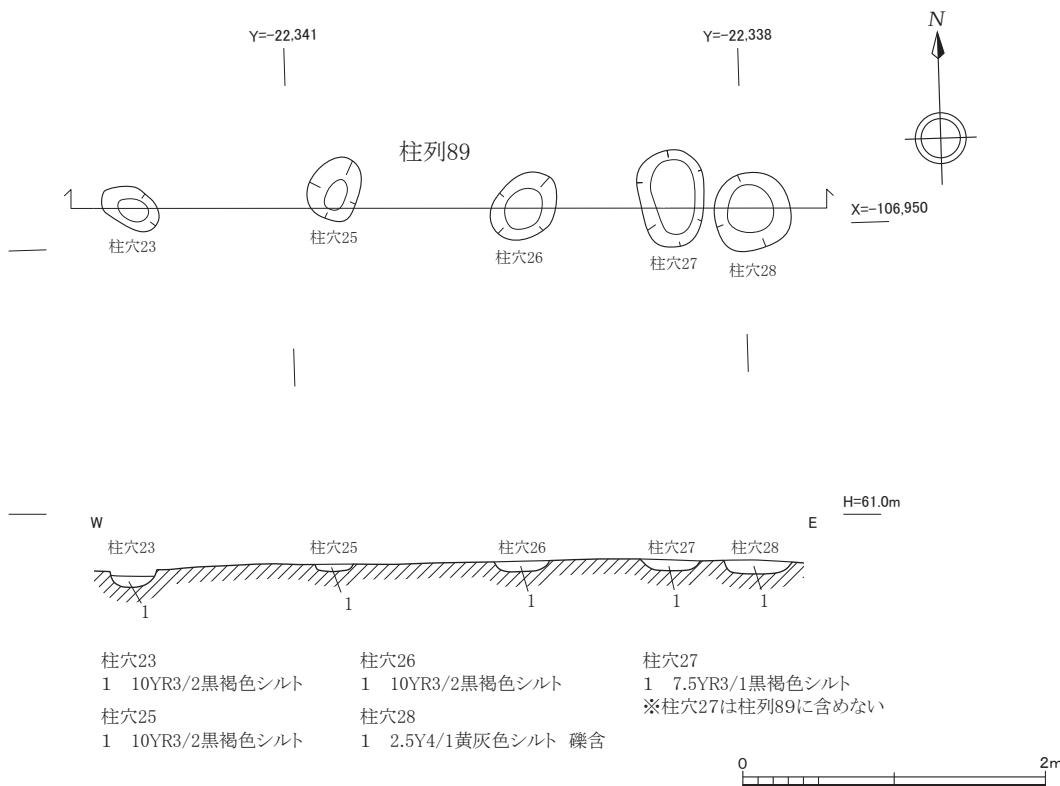
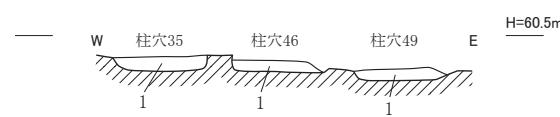
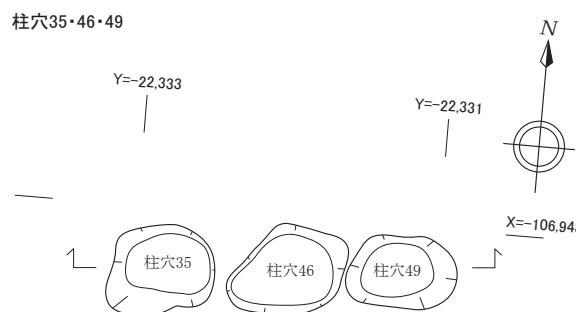


図18 柱列89平面・断面図（1：50）



柱穴49

1 10YR4/2灰黄褐色シルト 磯・遺物含

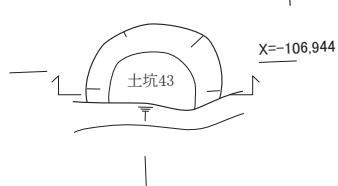
柱穴35

1 10YR3/2黒褐色シルト 小石・遺物含

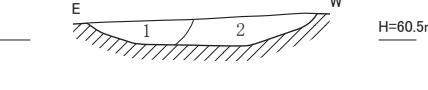
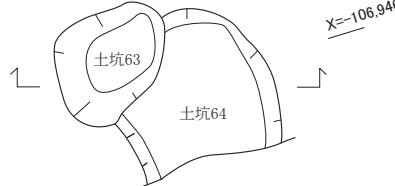
柱穴46

1 10YR3/2黒褐色シルト 小石・遺物含

土坑43



土坑63・64



1 10YR4/2灰黄褐色シルト 小石多量含 [土坑63]
2 10YR4/1褐色シルト 小石多量含 [土坑64]

1 2.5Y3/2黒褐色シルト 磯多量含



図19 柱穴35・46・49・土坑43・63・64平面・断面図 (1:50)

溝心に乗ることから、溝13と何らかの関連がある遺構か、もしくは溝13より古い塙の柱列と想定していたが、溝13の底面に柱穴痕が見られないこと、柱穴35・46・49の柱間がほぼ密接しており、建物の柱列としては考えにくいことから、単独の柱穴として扱うこととした。

遺物は柱穴46から古い遺物の混入である10世紀後半頃の所産と考えられる土師器皿が、柱穴49から16世紀前半～後半頃の所産と考えられる土師器皿の小片が出土した。

[その他柱穴]

並びが確認できなかった単独の柱穴である。

柱穴24（図12）

C 2区で検出した。検出時の規模は、東西長0.25m、南北長約0.3m、深さは0.2m、埋土は黒褐色シルトで小石を含む。

遺物の出土はなかった。

柱穴27（図12）

B 3区で検出した。検出時の規模は、東西長0.45m、南北長0.65m。深さは約0.25m。埋土は黒褐色シルト。

遺物の出土はなかった。

柱穴29（図12）

C 3・C 4区で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.7m。深さは0.15m。埋土は黒褐色シルトで礫を含む。

遺物は16世紀前半～半ば頃の所産と考えられる土師器皿の小片が出土した。

柱穴31（図12）

D 3区で検出した。検出時の規模は、東西長約0.5m、南北長約0.5m。深さは約0.15m。埋土は黒褐色シルトで礫を含む。

遺物は16世紀前半～半ば頃の所産と考えられる土師器皿の小片が出土した。

柱穴33（図12）

D 3区で検出した。検出時の規模は東西長約0.3m、南北長約0.3m。深さは約0.1m。埋土は黒褐色シルト。

遺物の出土はなかった。

柱穴48（図12）

C 1で検出した。検出時の規模は、東西長約0.3m、南北長約0.4m。深さは約0.2m。埋土は黒褐色シルトで礫を含む。

遺物の出土はなかった。

柱穴59（図12）

B 2区で検出した。検出時の規模は、東西長0.45m、南北長0.35m。深さは約0.1m。埋土は黒褐色シルト。

遺物の出土はなかった。

柱穴60 (図12)

B 2区で検出した。検出時の規模は、東西長約0.3m、南北長約0.3m。深さは約0.15m。埋土は黒褐色シルト。

遺物は土師器皿の小片が出土した。

柱穴61 (図12)

D 3区で検出した。検出時の規模は、東西長約0.2m、南北長約0.2m。深さは約0.2m。埋土は灰黄褐色シルト。

遺物の出土はなかった。

柱穴65 (図12)

B 2区で検出した。検出時の規模は、東西長0.35m、南北長約0.4m。深さは約0.2m。埋土は灰褐色シルト。

遺物は土師器皿の小片が出土した。

柱穴68 (図12)

C 2区で検出した。検出時の規模は、東西長約0.6m、南北長約0.3m。深さは約0.1m。埋土は灰褐色シルト。

遺物の出土はなかった。

柱穴69 (図12)

C 2区で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.2m。深さは0.05m。埋土は灰褐色シルト。

遺物の出土はなかった。

柱穴93 (図12)

C 3区で検出した。検出時の規模は、東西長0.25m、南北長約0.5m。深さは0.15m。埋土は黒褐色シルト。遺物の出土はなかった。

第5層 (図20 図版6-2)

A 2区で検出した。第2面上面である第6層上に堆積した層であり地山層が黒褐色に変色したものである。遺物の出土はなかった。



図20 第5層完掘平面図 (1:80)

3 出土遺物

遺物はコンテナで14箱分が出土した。室町時代後期～桃山時代初期頃の土師器の皿と鍋がほとんどを占め、その中に瓦質土器、施釉陶器、焼締陶器などが含まれる。江戸時代の遺構からは土師器皿の他に染付、施釉陶器、瓦が出土している。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	Aランク点数	Bランク点数	Cランク箱数
平安時代	灰釉陶器		灰釉陶器 1 点		
室町時代～桃山時代	土師器皿、土師器鍋、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、青磁、石製品		土師器 56 点、瓦質土器 2 点、焼締陶器 5 点、施釉陶器 2 点、青磁 2 点、石製品 1 点		
江戸時代	土師器、染付、施釉陶器、瓦		土師器 1 点		
合計		16 箱	70 点 (2 箱)	0 点	14 箱

* コンテナ箱数は、整理段階で2箱増加した。

(1) 第1面遺構出土遺物

遺構検出中 (図21 図版7-1)

瓦質土器(1)が出土した。いわゆる奈良火鉢と呼ばれるもので、口径32.2cm、残存器高16.5cm、ほぼ直立し口縁部に2本の突帯を貼り付ける。突帯間に11弁の菊の押花紋を等間隔に配置する。外面と口縁部内面には縦方向のミガキを施し、内面にはオサエが残る。16世紀前半～半ば頃の所産と考えられる。

〔土坑〕

土坑02 (図21 図版7-2)

土師器(2～6)が出土した。いずれも土師器皿Sである。

2は口径9.9cm、器高1.8cm、口縁部はやや外反気味に立ち上がり、端部は丸みを帯びる。口縁部には煤が付着する。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、外面はオサエを施す。

3は口径13.9cm、器高2.1cm、口縁部はやや外反気味に立ち上がり、端部はやや丸みを帯びる。内面の立ち上がり部分には薄い凹みを施す。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、外面はオサエを施す。

4は口径13.9cm、器高2.1cm、口縁部は直線に立ち上がり、端部はやや丸みを帯びる。内面の立ち上がり部分には薄い凹みを施す。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、外面はオサエを施す。

5は口径12.9cm、器高2.1cm、口縁部はやや外反気味に立ち上がり、端部は丸みを帯びる。

6は口径12.9cm、器高2.2cm、口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、外面はオサエを施す。

2～6はいずれも10C段階に属し、16世紀後半頃の所産と考えられる。

土坑11（図21 図版7-2）

土師器（7）が出土した。土師器皿S bである。口径8.6cm、器高1.8cm、口縁部は外反し、端部は摘まみ上げ段状にする。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、外面はオサエを施す。10B段階に属し、16世紀半ば～後半の所産と考えられる。

土坑17（図21 図版7-2）

土師器（8）が出土した。土師器皿Sである。口径9.6cm、器高1.6cm、底部から口縁部にかけて大きく外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、外面はオサエ、内面立ち上がり部分に深い沈線を施す。14A段階に属し、19世紀前半頃の所産と考えられる。他に同時期の染付、施釉陶器が出土している。

土坑20（図21 図版7-2）

土師器（9）が出土した。土師器皿Sである。口径11.9cm、器高1.8cm、口縁部はわずかに外反し、端部はやや丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、外面はオサエを施す。10C段階に属し、16世紀後半頃の所産と考えられる。

土坑21（図21 図版8）

土師器（10～15）が出土した。いずれも土師器鍋である。

10は口径29.8cm、残存器高4.3cm、口縁部はやや外反し、端部はやや凹面を形成する。口縁部はヨコナデ、内面は横方向のハケ、外面はオサエを施す。10B段階に属し、16世紀半ば～後半頃の所産と考えられる。

11は口径23.8cm、残存器高2.9cm、口縁部は大きく外反し、端部は凹面を形成する。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、外面はオサエとナデを施す。内面に煤の付着がある。

12は口径23.9cm、残存器高3.8cm、口縁部は大きく外反し、端部は凹面を形成する。口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面はオサエを施す。11・12は10C段階に属し、16世紀後半頃の所産と考えられる。

13は口径11.1cm、器高4.5cm、口縁部は大きく外反し、端部は凹面を形成する。口縁部はヨコナデ、内面はヨコ方向のナデ、外面はオサエを施す。内面に煤が付着する。

14は口径24.1cm、残存器高4.4cm、口縁部は曲線的に立ち上がり、端部は平坦。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、外面はオサエである。内面、外面ともに煤が付着する。

15は口径23.9cm、器高4.4cm、口縁部は曲線的に立ち上がり、端部は平坦。口縁の一部を凹ませ注口部を施す。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、外面はオサエのちナデを施す。内面、外とも煤が付着する。

13～15はいずれも10C段階に属するが、10～12と比べ器高が浅く、やや時代が下るものと思われるため、16世紀後半～末頃の所産と考えられる。いわゆる江戸時代の焙烙の原型に当たるものと考えられる。

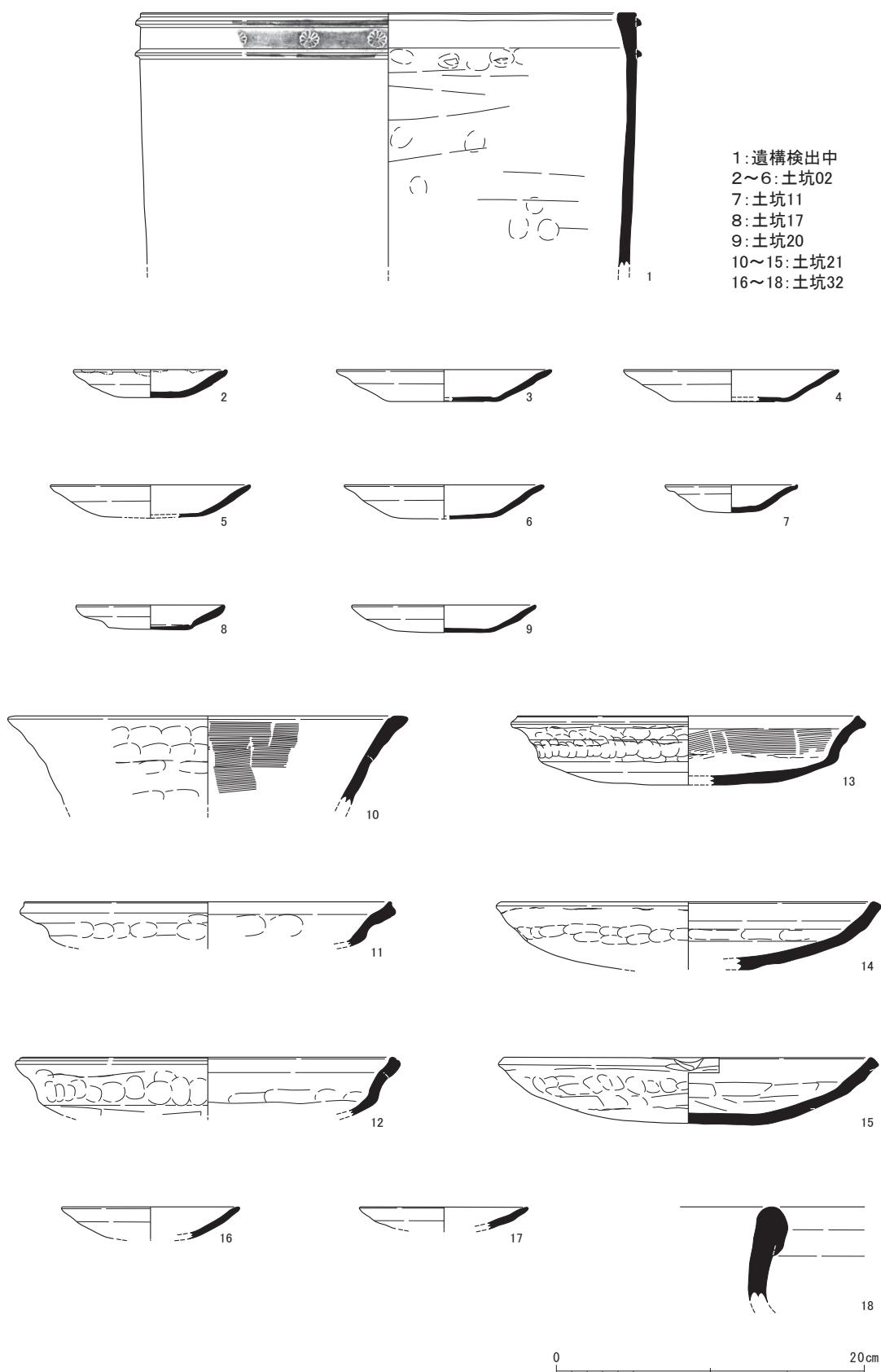


図21 出土遺物1 (1:4)

土坑32 (図21 図版7-2)

土師器 (16・17)、焼締陶器 (18) が出土した。16・17は土師皿S bである。

16は口径11.5cm、器高2.1cm、口縁部はやや外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、外面はオサエを施す。

17は口径10.8cm、器高1.4cm、口縁部は外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、外面はオサエを施す。16・17は10C段階に属し、16世紀後半頃の所産と考えられる。

18は備前甕の口縁である。口径不明、残存器高6.2cm、内面、外面ともロクロナデで口縁は外側に折り曲げ玉縁とする。16世紀頃の所産と考えられる。

溝13 (図22 図版9・10-1)

土師器 (19~26)、青磁 (27)、瓦質土器 (28)、施釉陶器 (29・30)、焼締陶器 (31~33)、石鍋 (34) が出土した。

19は土師器皿S b、20~26は土師器皿Sである。

19は口径7.8cm、器高1.8cm、口縁部は曲線的に立ち上がり、端部は丸みを帯びる。底部はやや内側へ凹ませている。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、外面はオサエを施す。

20は口径10.4cm、器高1.9cm、口縁部はやや外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、外面はオサエを施す。内面・外面の一部に黒変がある。

21は口径10.0cm、器高2.1cm、口縁部はわずかに外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、外面はオサエを施す。

22は口径10.0cm、器高1.8cm、口縁部は外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、外面はオサエを施す。

23は口径9.2cm、器高は1.7cm、口縁部はやや外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、外面はオサエを施す。

24は口径13.0cm、器高1.7cm、口縁部は外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、外面はオサエを施す。

25は口径14.8cm、器高2.2cm、口縁部はやや外反し、端部は丸みを帯びる。内面の立ち上がり部分には薄い凹みを施す。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、外面はオサエを施す。

26は口径14.0cm、器高2.1cm、口縁部はやや外反し、端部は丸みを帯びる。内面の立ち上がり部分に薄い凹みを施す。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、外面はオサエを施す。19~26はいずれも10Cに属し、16世紀後半頃の所産と考えられる。

27は青磁皿の口縁部である。小片のため口径不明、残存器高3.1cm、口縁部は外反し、端部は垂直に立ち上げ、盤状とする。内面・外面とも薄いオリーブ緑色で、内面に蓮弁を簡略化したと思われる線刻の文様がある。15世紀~16世紀頃の明代の龍泉窯の所産と考えられる。

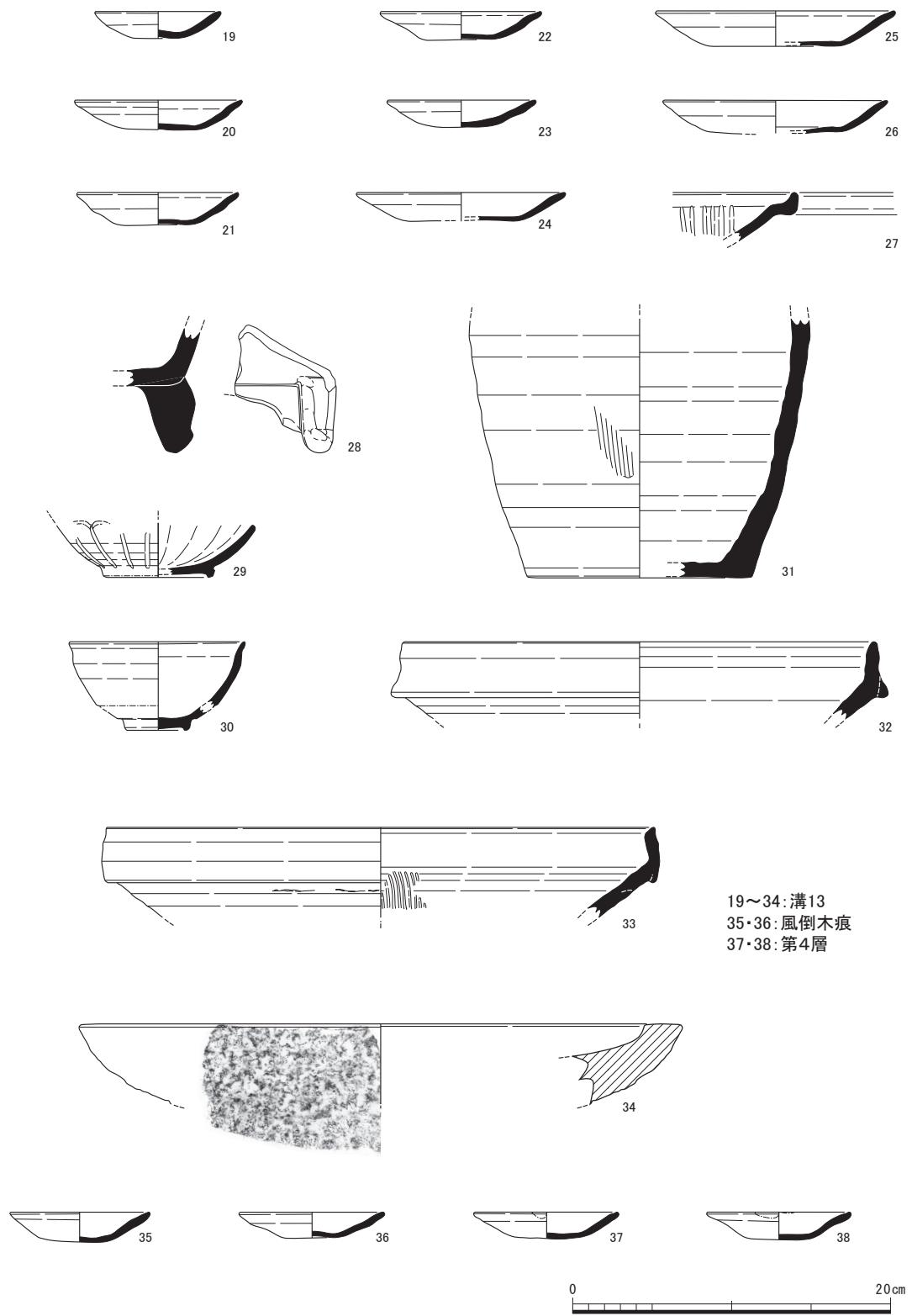


図22 出土遺物2 (1:4)

28は瓦質土器で、いわゆる奈良火鉢の脚部である。残存器高は7.8cm、底部に獸脚とその横に持ち送りを貼り付け、その後に内面・外面ともナデを施す。16世紀半ば～後半頃の所産と考えられる。

29は美濃系の菊皿である。口径は口縁が失われており不明。底径6.4cm、残存器高3.4cm、ロクロ成形後、回転ケズリで成形を行い、内面・外面を削り出しにより菊花弁を造形、内面・外面とも長石釉を施釉している。高台畳付けには釉ハギがある。16世紀後半～末頃の所産と考えられる。

30は瀬戸系の天目茶碗である。口径11.0cm、底径3.9cm、器高5.6cm、口縁部はやや外反するいわゆる「すっぽん口」で、底部は削り出し高台である。ロクロ成形後、内面は黒色の鉄釉を施釉しており、一部窯変のため褐色に変色する。16世紀後半～末頃の所産と考えられる。

31は備前系の壺である。口縁部欠損のため口径不明、底径14.0cm、残存器高16.3cm、内面・外面ともロクロナデを施し、一部ハケナデと思われる痕がある。いわゆる種壺と思われ、15世紀～16世紀後半頃の所産と思われる。

32は備前すり鉢の口縁である。口径29.4cm、残存器高4.8cm、口縁部は「く」の字の形に外反し端部は直立する。内面・外面ともロクロナデ、口縁部外面に突帯を貼り付けナデを施す。

33も32と同じく備前すり鉢の口縁である。口径29.4cm、残存器高4.8cm、口縁部は「く」の字に外反し、端部は直立する。内面・外面ともロクロナデ、内面に9条のすり目がある。15世紀～16世紀後半頃の所産と思われる。

34は石鍋である。口径37.8cm、残存器高5.1cm、外面はノミによる粗い成形、口縁端部と内面は平滑に磨き、端部は平坦である。内面に使用痕がある。16世紀後半頃の所産と考えられる。

風倒木痕（図22 図版10-2）

土師器（35・36）が出土した。いずれも土師器皿S bである。

35は口径8.9cm、器高1.8cm、口縁部はやや外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面はオサエを施す。

36は口径9.0cm、器高1.6cm、口縁部はやや外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、外面はオサエを施す。口縁部の一部に煤が付着する。35・36はいずれも10Cに属し、16世紀後半頃の所産と考えられる。

第4層（図22 図版10-2）

土師器（37・38）が出土した。いずれも土師器皿S bである。

37は口径8.8cm、器高1.7cm、口縁部はやや外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、外面はオサエを施す。口縁部の一部に煤が付着する。

38は口径8.9cm、器高1.8cm、口縁部は外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、外面はオサエを施す。口縁部の一部に煤が付着する。37・38はいずれも10Cに属し、16世紀後半頃の所産と考えられる。

(2) 第2面遺構出土遺物

土坑34 (図23 図版11-1)

土師器 (39) が出土した。土師器皿である。小片のため口径不明、残存器高は7.5cm、口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、端部は丸みを帯びている。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、外面はオサエを施す。10 B～10 Cに属し、16世紀半ば～後半頃の所産と考えられる。

土坑54 (図23・図版11-1)

土師器 (40) が出土した。土師器皿 S b である。口径7.9cm、器高1.7cm、口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、外面はオサエを施す。10 B～10 Cに属し、16世紀半ば～後半頃の所産と考えられる。

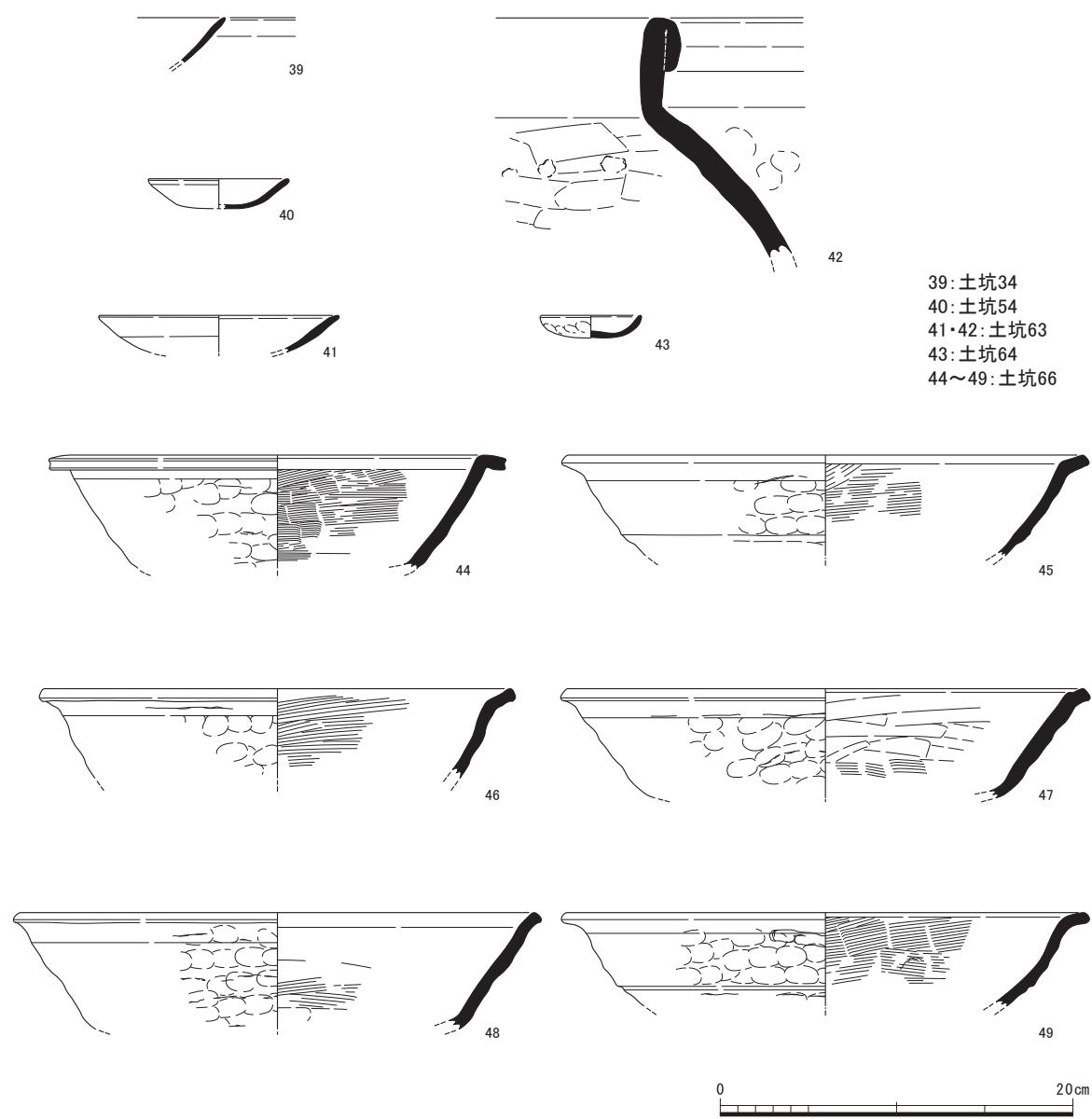


図23 出土遺物3 (1:4)

土坑63 (図23 図版11-1)

土師器 (41)、焼締陶器 (42) が出土した。

41は土師器皿S bである。口径13.5cm、残存器高2.1cm、口縁部はやや外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、外面はオサエを施す。10 B～10 Cに属し、16世紀半ば～後半頃の所産と考えられる。

42は備前甕の口縁である。残存器高14.7cm、口縁部は直立し、端部は外側に折り曲げ玉縁とする。口縁部はヨコナデ、内面は横方向の板ナデ、外面はオサエとロクロナデを施す。16世紀頃の所産と考えられる。

土坑64 (図23 図版11-1)

土師器 (43) が出土した。土師器皿Nである。口径5.6cm、器高1.3cm、口縁部は曲線的に立ち上がり、端部は丸みを帯びる。内面はナデ、外面はオサエを施す。10 B～10 Cに属し、16世紀半ば～後半頃の所産と考えられる。

土坑66 (図23 図版11-1)

土師器 (44～49) が出土した。いずれも土師器鍋である。

44は口径23.5cm、残存器高6.4cm、口縁部は水平方向に外反し、端部は凹面を形成する。口縁部はヨコナデ、内面は横方向のハケ、外面はナデのちオサエを施す。外面の一部に煤が付着する。

45は口径29.2cm、残存器高5.7cm、口縁部は大きく外反し、端部はやや丸みを帯びる。口縁部はヨコナデ、内面は横方向のハケとナデ、外面はナデのちオサエを施す。

46は口径26.5cm、残存器高5.1cm、口縁部は大きく外反し、端部はやや丸みを帯びる。口縁部はヨコナデ、内面は横方向のハケ、外面はナデのちオサエを施す。

47は口径29.2cm、残存器高6.2cm、口縁部はやや外反し、端部はやや丸みを帯びる。口縁部はヨコナデ、内面は横方向のナデとハケ、外面はナデのちオサエを施す。

48は口径29.2cm、残存器高6.6cm、口縁部はやや外反し、端部はやや丸みを帯びる。口縁部はヨコナデ、内面は横方向のハケのちナデ、外面はナデのちオサエを施す。

49は口径29.4cm、残存器高5.3cm、口縁部は大きく外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部はヨコナデ、内面は横方向のハケ、外面はナデのちオサエを施す。

44～49はいずれも10 B～10 Cに属し、16世紀半ば～後半頃の所産と考えられる。

溝50 (図24 図版11-2)

土師器 (50～52) が出土した。50・51は土師器皿S b、52は土師器皿Sである。

50は口径8.6cm、器高2.4cm、口縁部はやや外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、外面はオサエを施す。51は口径9.1cm、器高2.1cm、口縁部はやや外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、外面はオサエを施す。52は口径14.9cm、器高2.2cm、口縁部はやや外反し、端部は丸みを帯びる。50～52はいずれも10 Bに属し、16世紀前半～半ば頃の所産と考えられる。

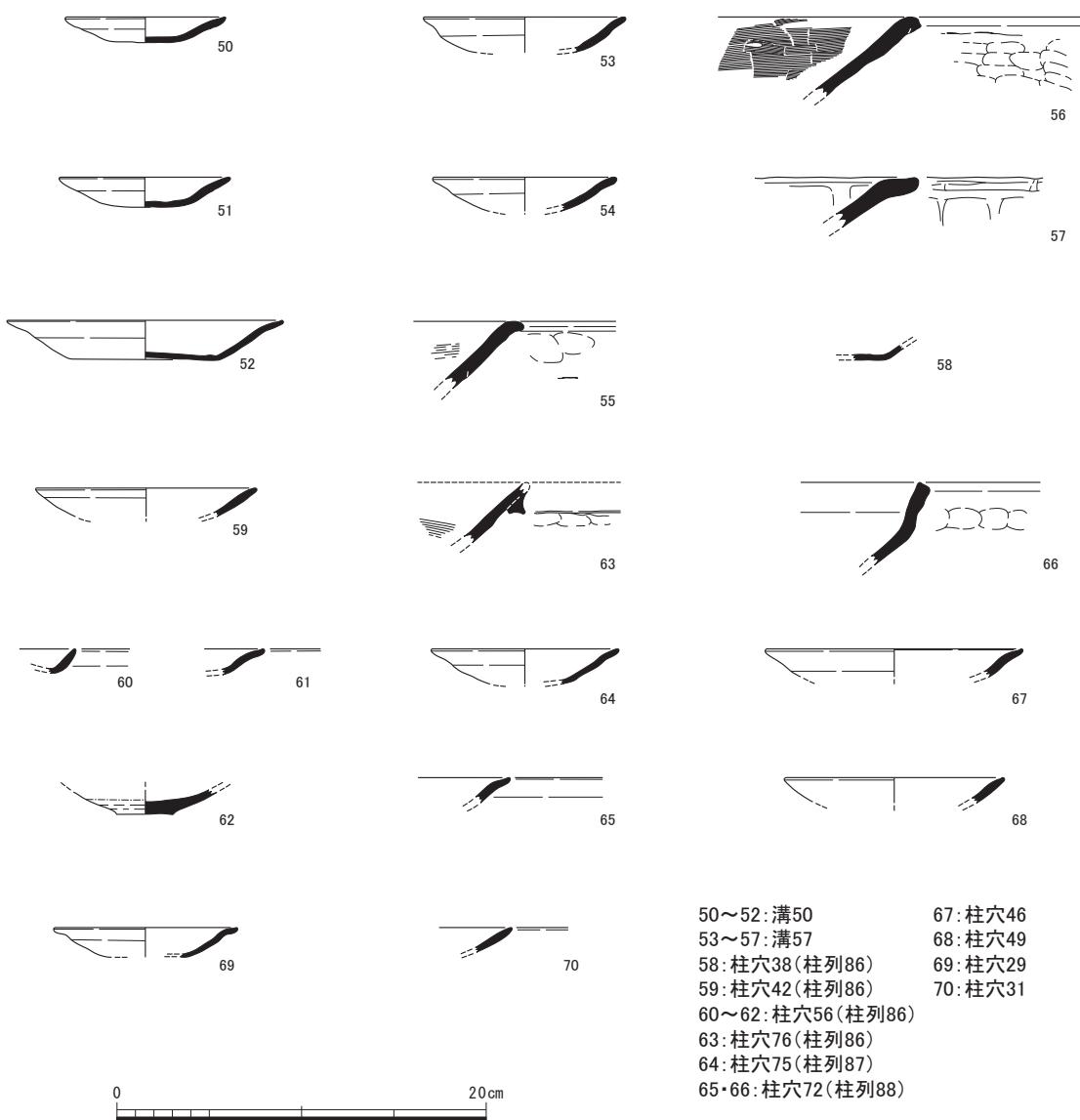


図24 出土遺物4 (1:4)

溝57 (図24 図版11-2)

土師器 (53～56)、青磁 (57) が出土した。53・54が土師器皿S b、55・56が土師器鍋である。

53は口径10.9cm、残存器高1.9cm、口縁部はやや外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、外面はオサエを施す。

54は口径9.8cm、残存器高1.9cm、口縁部はやや外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、外面はオサエを施す。

55は小片のため口径不明、残存器高3.7cm、口縁部はやや外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部はヨコナデ、内面はハケ、外面はオサエを施す。

56は小片のため口径不明、残存器高4.3cm、口縁部はやや外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部はヨコナデ、内面は横方向のハケ、外面はオサエを施す。53～56は10Bに属し、16世紀半ば頃の

所産と考えられる。

57は青磁皿の口縁である。小片のため口径不明、残存器高2.7cm、口縁部は外反する。内面・外
面とも青緑色の施釉を施す。15世紀～16世紀頃の明代の龍泉窯の所産と考えられる。

柱穴38（柱列86）（図24 図版12-1）

土師器（58）が出土した。土師器皿である。小片のため口径不明、残存器高0.8cm、内面はヨコ
ナデ、外面はオサエを施す。10Bもしくは10Cに属し、16世紀半ば～後半頃の所産と考える。

柱穴42（柱列86）（図24 図版12-1）

土師器（59）が出土した。土師器皿S bである。口径11.9cm、残存器高1.6cm、口縁部はわずか
に外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、外面はオサエを施す。10
Bもしくは10Cに属し、16世紀半ば～後半頃の所産と考えられる。

柱穴56（柱列86）（図24 図版12-1）

土師器（60・61）、灰釉陶器（62）が出土した。60は土師器皿N、61は土師器皿Sである。

60は小片のため口径不明、残存器高1.3cm、口縁部はやや直線的に立ち上がり、端部は丸みを帶
びる。口縁部の外面から内面にかけてヨコナデ、外面はナデを施す。

61は小片のため口径不明、残存器高1.4cm、口縁部はやや外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部
はヨコナデ、外面はオサエを施す。60・61はいずれも10Bに属し、16世紀前半～半ば頃の所産と
考えられる。

62は灰釉陶器の皿である。口縁部欠損のため口径不明。底径3.0cm、残存器高1.3cm、外面はロク
ナデ、底部は回転ケズリにより高台を成形、外面と内面にやや緑がかった灰釉を施釉する。10世
紀頃の所産と考えられる。古い遺物の混入である。

柱穴76（柱列86）（図24 図版12-1）

土師器（63）が出土した。土師器鍋である。小片のため口径不明、残存器高3.2cm、内面はヨコ
ナデとハケ、外面はナデを施し、突帯を貼り付ける。10Bに属し、16世紀前半～半ば頃の所産と
考えられる。

柱穴75（柱列87）（図24 図版12-1）

土師器（64）が出土した。土師器皿S bである。口径10.2cm、残存器高1.9cm、口縁部はやや外
反し、端部は丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、外面はオサエを施す。10Bに
属し、16世紀前半～半ば頃の所産と考えられる。

柱穴72（柱列88）（図24 図版12-1）

土師器（65・66）が出土した。65は土師器皿、66は土師器鍋である。

65は小片のため口径不明、残存器高1.4cm、口縁部はやや外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部
はヨコナデ、外面はオサエを施す。

66は小片のため口径不明、残存器高は4.52cm、口縁部はやや外反し、端部は凹面を形成する。口
縁部外面から内面にかけてヨコナデ、外面はオサエを施す。

65・66いずれも10B～10Cに属し、16世紀前半～後半頃の所産と考えられる。

柱穴29 (図24 図版12-2)

土師器 (67) が出土した。土師器皿Sである。口径13.8cm、残存器高1.5cm、口縁部はやや外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部はヨコナデ、外面はオサエを施す。10 Bに属し、16世紀前半～半ば頃の所産と考えられる。

柱穴31 (図24 図版12-2)

土師器 (68) が出土した。土師器皿S bである。口径11.8cm、残存器高1.4cm、口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸みを帯びる。口縁部はヨコナデを施す。10 Bに属し、16世紀前半～半ば頃の所産と考えられる。

柱穴46 (図24 図版12-2)

土師器 (69) が出土した。土師器皿Aである。口径9.9cm、残存器高1.6cm、口縁部は外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部外面から内面にかけてヨコナデ、外面はオサエである。3 Bに属し、10世紀後半頃の所産と考えられる。古い遺物の混入である。

柱穴49 (図24 図版12-2)

土師器 (70) が出土した。土師器皿である。小片のため口径不明、残存器高1.3cm、摩滅のため調整は不明。10 B～10 Cに属し、16世紀前半～後半頃の所産と考えられる。

第IV章　まとめ

今回の調査では、江戸時代以降の土坑群、室町時代後期～末期（16世紀半ば～後半）の溝、室町時代後期（16世紀前半）の溝・柱列・土坑が検出された。特に室町時代後期～末期にかけての溝、柱列は、町田本洛中洛外図屏風および上杉本洛中洛外図屏風に描かれている大心院の敷地と推定される今回の調査地において⁽¹⁾、敷地堀と推測される遺構の構築から豊臣秀吉の妙顯寺移転に際する整地による消滅までの変遷を追うことのできる成果となった。

第1面では、東西方向に延びる溝13、土取り穴と考えられる土坑02・20、廃棄土坑である土坑21、風倒木痕、他に近世土坑を検出した。

溝13は16世紀半ば～後半頃の整地層と想定される第4層を掘り込む形で作られている。

遺物は16世紀後半頃の土師器皿がコンテナ2箱分出土し、その他にも美濃系の長石釉の菊皿、瀬戸天目茶碗が出土した。出土遺物に時期差は無く、天正12（1584）年の豊臣秀吉による妙顯寺移転に伴う整地で、埋め立てられた際の遺物と考えられる。

土坑02・20は土取りのための試し掘りの穴と思われ、土坑02を掘り直す形で土坑02が掘られている。遺物は溝13と同時期の土師器皿が少量出土し、溝13と同じ妙顯寺移転に伴う整地で埋め立てられたものと思われる。

土坑21は16世紀後半～末頃の所産と考えられる土師器鍋が多量に出土した。妙顯寺移転の整地の際に掘削し廃棄した土坑と考えられる。

風倒木痕は調査区の西端で検出した。溝13の埋土から掘り込まれており、溝13の一部を破壊している。天正12年の豊臣秀吉による妙顯寺の移転以後、大心院の敷地は妙顯寺となるが、寛永19（1642）年頃に描かれた「寛永度萬治前洛中絵図」⁽²⁾では調査区に当たる場所には建物等は描かれていらない。これに基づくとすれば、風倒木痕は妙顯寺の境内の空き地にて植樹したあとに何らかの自然災害等で倒れた後のものと思われる。遺物としては溝13を植樹のため掘り返した際の土師器皿がほとんどで、江戸時代にまで下るものが見られなかったため、妙顯寺移転のしばらく後に植樹され、江戸時代初期までの間に倒れたため、根跡を埋めたものと考えられる。近世の遺構は土坑群を検出した。瓦や陶磁器が多く出土し、廃棄のための土坑と思われる。

第2面では溝50・57・柱列86・87・88を検出した。

溝50と溝57はほぼ正方位で東西方向に延び、溝57の中央には約0.8m～1.0mの柱間で10個の柱穴が同軸上に並ぶ柱列86がある。また、溝57と並行して南側に溝50が隣接する。このように溝の中心に柱列を持つ遺構としては2004年に細川典厩邸の敷地と推定される表千家不審庵の調査で検出した溝状遺構がある⁽³⁾。東西方向の溝状遺構の中心に柱列が並んでおり、今回の調査で検出した溝57、柱列86と類似する。不審庵の調査報告では、布掘り掘方の中に柱穴を掘った堀の基礎であるとしており、近衛邸の敷地と推定される同志社大学新町校地の調査でも同様の遺構が検出しており⁽⁴⁾、上京の武家や公家、寺院に広く用いられた形式の堀であるとしている。これらのことと踏まえて、今回の調査で検出した溝57と柱列86は堀の布掘り基礎、南側に並行して隣接する溝50は

塀の雨落ち溝ではないかと思われる。

次に柱列87があげられる。柱列87は溝57・柱列86と同位置に切り込むように存在している。表千家不審庵の調査で検出した布掘り基礎の塀跡でも同様の柱列がみられ、布掘り基礎の塀から掘立柱塀へと建て替えたとしており、柱列87も同様に布掘り基礎の塀から掘立柱塀へと建て替えた際のものと考えられる。ただし、柱列86のように明確な並びは確認できなかった。

さらに柱列87の柱穴を切る形で柱列88がある。柱間は約1.6mで軸はやや北に振れる。柱列87と88の出土遺物に時期差が見られないため、溝57・柱列86の布掘り基礎の塀から掘立柱塀へと建て替える際に、何度か柱位置を変えた後、最終的に柱列88の位置に落ち着いたものと考えられる。

以上の考察をまとめると、以下の通り変遷が考えられる。

- ① 溝57と柱列86の布掘り基礎の塀と溝50の雨落ち溝が造られる（図13・16）。
- ② 布掘り基礎の塀から柱列87、88の掘立柱塀へと建て替わる（図14・15・17）。
- ③ 塀が撤去され整地された後に区画の溝13が造られる（図9・10）。
- ④ 天正12（1584）年の豊臣秀吉による妙顕寺移転での整地で溝13が埋められる。
- ⑤ 整地後に根穴が掘られ植樹されるが倒木し、それによる根穴が埋められる（図9）。
- ⑥ 妙顕寺時代の廃棄土坑が掘削される。

布掘り基礎の塀は、町田本洛中洛外図屏風に描かれた大心院の時代の室町時代後期頃（16世紀前半）から存在した可能性はあるが、それ以後は室町時代末期（16世紀後半）までの数十年の間に変化していったものと思われる。

調査区の位置は妙顕寺移転の天正12年～江戸時代にかけては妙顕寺の境内であったが、近代以降は妙顕寺の敷地から離れており、昭和21年の航空写真には建物のようなものが見える⁽⁵⁾。出土したガラス瓶等から、戦前に地山面まで達する大規模な掘削工事が行われたと考えられる。

註

- (1) 松岡 満 『京都時代MAP 安土桃山編』 新創社 2006年
- (2) 京都大学貴重資料デジタルアーカイブ 『寛永度萬治前洛中絵図』
- (3) 吉崎 伸 『上京遺跡』 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-9 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- (4) 『同志社大学新町校地発掘調査概報』 同志社大学地学術調査委員会 1974年
- (5) 国土地理院地図・空中写真閲覧サービス 『USA-R 275-A-7-58 京都東北部 昭和21年』

参考文献

- 『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編 1995年
平尾 政幸 「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年

表4 遺物観察表

掲載 No	器種	器形	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	厚 (cm)	色調	備考
1	瓦質土器	鉢	-	遺構検出中	32.2	(16.5)	-	-	N3/0 暗灰	奈良火鉢
2	土師器	皿	E1, E2	土坑 02	9.9	1.8	-	-	10YR8/2 灰白	
3	土師器	皿	E1, E2	土坑 02	13.9	2.1	-	-	10YR8/2 灰白	
4	土師器	皿	E1, E2	土坑 02	13.9	2.1	-	-	10YR8/2 灰白	
5	土師器	皿	E2	土坑 02	12.9	(2.1)	-	-	10YR8/3 浅黄橙	
6	土師器	皿	E2	土坑 02	12.9	2.2	-	-	10YR8/3 浅黄橙	
7	土師器	皿	B3	土坑 11	8.6	1.8	-	-	10YR8/2 灰白	
8	土師器	皿	D4, E4	土坑 17	9.6	1.6	-	-	10YR8/2 灰白	14A
9	土師器	皿	D2	土坑 20	11.9	1.8	-	-	10YR6/2 灰黄褐	
10	土師器	鍋	B2	土坑 21	29.8	(5.8)	-	-	10YR5/2 灰黄褐	
11	土師器	鍋	B2	土坑 21	23.8	(2.9)	-	-	7.5YR4/1 褐灰	
12	土師器	鍋	B2	土坑 21	23.9	(3.8)	-	-	10YR6/2 灰黄褐	
13	土師器	鍋	B2	土坑 21	11.1	4.5	-	-	10YR8/1 灰白	
14	土師器	鍋	B2	土坑 21	24.1	(4.4)	-	-	10YR6/2 灰黄褐	
15	土師器	鍋	B2	土坑 21	23.9	4.4	-	-	10YR7/2 にぶい黄橙	
16	土師器	皿	D3	土坑 32	11.5	(2.1)	-	-	10YR6/2 灰黄褐	
17	土師器	皿	D3	土坑 32	10.8	(1.4)	-	-	7.5YR8/2 灰白	
18	焼締陶器	甕	D3	土坑 32	-	(6.2)	-	-	7.5YR4/2 灰褐	備前
19	土師器	皿	B3	溝 13	7.8	1.8	-	-	10YR8/3 浅黄橙	
20	土師器	皿	B3	溝 13	10.4	1.9	-	-	10YR8/2 灰白	
21	土師器	皿	B3	溝 13	10.0	2.1	-	-	10YR8/3 浅黄橙	
22	土師器	皿	B3	溝 13	10.0	1.8	-	-	10YR8/2 灰白	
23	土師器	皿	B3	溝 13	9.2	1.7	-	-	10YR8/3 浅黄橙	
24	土師器	皿	B3	溝 13	13.0	1.7	-	-	10YR8/2 灰白	
25	土師器	皿	B3	溝 13	14.8	2.2	-	-	10YR8/2 灰白	
26	土師器	皿	B3	溝 13	14.0	2.1	-	-	10YR8/3 浅黄橙	
27	青磁	皿	B3	溝 13	-	(3.1)	-	-	釉) 10Y6/2 オリーブ灰 胎) N8/0 白	龍泉窯系
28	瓦質土器	鉢	AB3	溝 13	-	(7.8)	-	-	2.5Y7/2 灰黄	奈良火鉢
29	施釉陶器	皿	B3	溝 13	-	(3.4)	6.4	-	釉) 2.5Y8/2 灰白 胎) 2.5Y8/1 灰白	美濃系菊皿
30	施釉陶器	椀	B3	溝 13	11.0	5.6	3.9	-	釉) 7.5YR2/1 黒 胎) 10YR8/4 浅黄橙	瀬戸天目茶椀
31	焼締陶器	壺	-	溝 13	-	(16.3)	14.0	-	N6/0 灰	備前
32	焼締陶器	すり鉢	B3	溝 13	29.4	(4.8)	-	-	10YR5/1 褐灰	備前
33	焼締陶器	すり鉢	B3	溝 13	34.4	(5.7)	-	-	2.5YR4/2 灰赤	備前
34	石製品	石鍋	A2	溝 13	37.8	(5.1)	-	-	-	
35	土師器	皿	A2, A3	風倒木痕	8.6	1.9	-	-	10YR8/2 灰白	
36	土師器	皿	A2, A3	風倒木痕	9.0	1.6	-	-	10YR8/2 灰白	
37	土師器	皿	C2, C3	第4層	8.8	1.7	-	-	10YR8/2 灰白	
38	土師器	皿	C2, C3	第4層	8.9	1.8	-	-	10YR8/2 灰白	
39	土師器	皿	D4	土坑 34	-	(2.5)	-	-	10YR8/2 灰白	

掲載 No	器種	器形	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	厚 (cm)	色調	備考
40	土師器	皿	C3	土坑 54	7.9	1.7	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙	
41	土師器	皿	B2	土坑 63	13.5	(2.1)	-	-	10YR8/3 浅黄橙	
42	焼締陶器	甕	B2	土坑 63	-	(14.7)	-	-	10YR4/1 褐灰	備前
43	土師器	皿	B2	土坑 64	5.6	1.3	-	-	10YR7/4 にぶい黄橙	
44	土師器	鍋	A3	土坑 66	23.5	(6.4)	-	-	10YR6/2 灰黄褐	
45	土師器	鍋	A3	土坑 66	29.2	(5.7)	-	-	10YR5/2 灰黄褐	
46	土師器	鍋	A3	土坑 66	26.5	(5.1)	-	-	10YR5/2 灰黄褐	
47	土師器	鍋	A3	土坑 66	29.2	(6.2)	-	-	2.5Y7/2 灰黄	
48	土師器	鍋	A3	土坑 66	29.2	(6.6)	-	-	10YR5/2 灰黄褐	
49	土師器	鍋	A3	土坑 66	29.4	(5.3)	-	-	10YR6/2 灰黄褐	
50	土師器	皿	C3	溝 50	8.6	2.4	-	-	10YR8/2 灰白	
51	土師器	皿	C3	溝 50	9.1	2.1	-	-	10YR8/2 灰白	
52	土師器	皿	C3	溝 50	14.9	2.2	-	-	10YR8/3 浅黄橙	
53	土師器	皿	B3	溝 57	10.9	(1.9)	-	-	10YR8/2 灰白	
54	土師器	皿	B3	溝 57	9.8	(1.9)	-	-	10YR8/2 灰白	
55	土師器	鍋	B3	溝 57	-	(3.7)	-	-	10YR5/2 灰黄褐	
56	土師器	鍋	B3	溝 57	-	(4.3)	-	-	10YR5/2 灰黄褐	
57	青磁	皿	C3	溝 57	-	(2.7)	-	-	釉) 2.5Y8/1 灰白 胎) 2.5GYR5/1 オリーブ灰	龍泉窯系
58	土師器	皿	D2	柱穴 38	-	(0.8)	-	-	7.5YR8/3 浅黄橙	
59	土師器	皿	D2	柱穴 42	11.9	(1.6)	-	-	10YR8/2 灰白	
60	土師器	皿	D2	柱穴 56	-	(1.3)	-	-	10YR7/2 にぶい黄橙	
61	土師器	皿	B3	柱穴 56	-	(1.4)	-	-	10YR8/2 灰白	
62	灰釉陶器	皿	B3	柱穴 56	-	(1.3)	3.0	-	釉) 5Y7/2 灰白 胎) N7/0 灰白	10世紀頃
63	土師器	鍋	C3	柱穴 76	-	(3.2)	-	-	10YR7/2 にぶい黄橙	
64	土師器	皿	C2	柱穴 75	10.2	(1.9)	-	-	10YR8/2 灰白	
65	土師器	皿	C3	柱穴 72	-	(1.4)	-	-	7.5YR8/4 浅黄橙	
66	土師器	鍋	C3	柱穴 72	-	(4.5)	-	-	N4/0 灰	
67	土師器	皿	C4	柱穴 29	13.8	(1.5)	-	-	10YR8/3 浅黄橙	
68	土師器	皿	D4	柱穴 31	11.8	(1.4)	-	-	10YR8/3 浅黄橙	
69	土師器	皿	D3	土坑 46	9.9	(1.6)	-	-	10YR8/3 浅黄橙	
70	土師器	皿	E3	柱穴 49	-	(1.3)	-	-	10YR8/3 浅黄橙	

図 版



1. 調査地遠景（北から妙顕寺を望む）



2. 第1面完掘状況（西から）



1. 溝13完掘状況（東から）



2. 溝13断面（攪乱部分・東から）



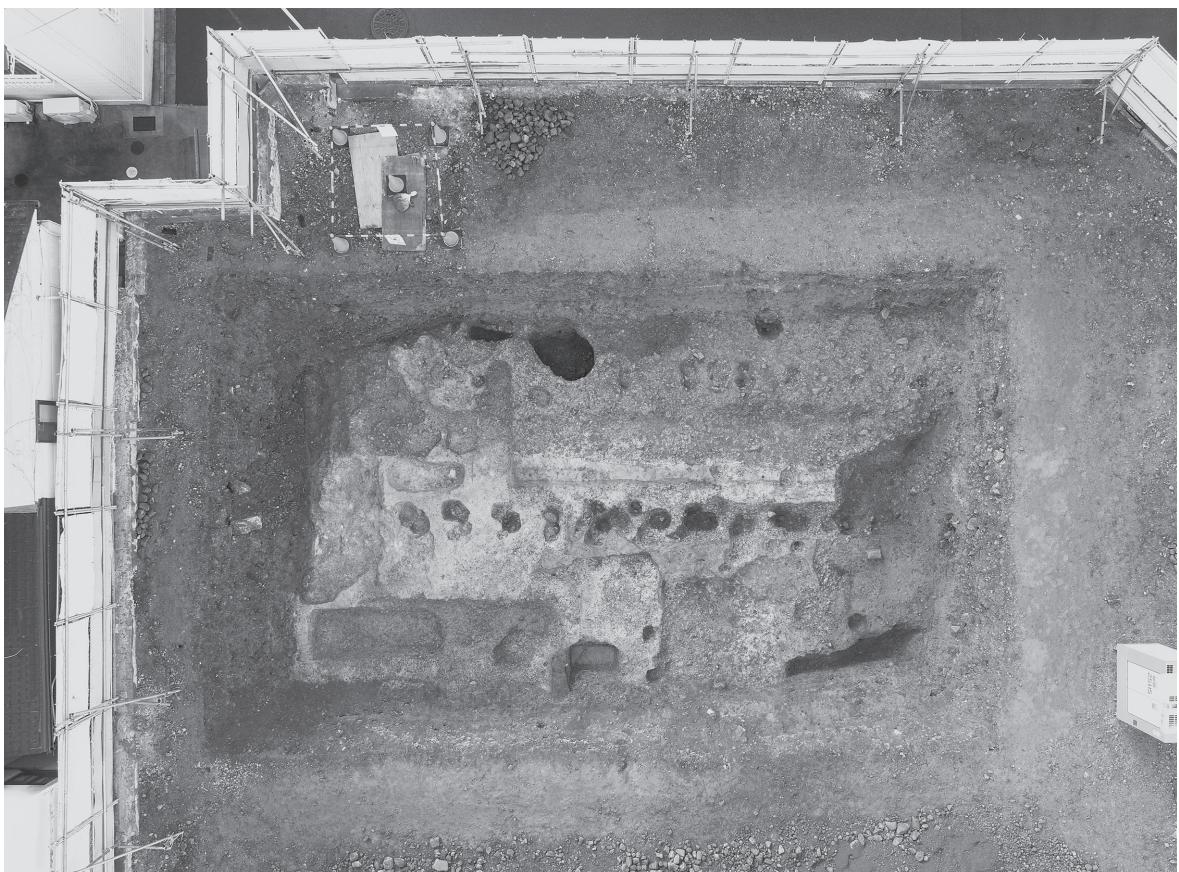
1. 土坑02・20完掘状況（西から）



2. 土坑02・20断面（西から）



1. 第2面完掘状況（西から）



2. 第2面完掘状況（上が南）



1. 溝50・57・柱列86・87・88完掘状況（東から）



2. 溝50・57・柱列86・87・88完掘状況（西から）



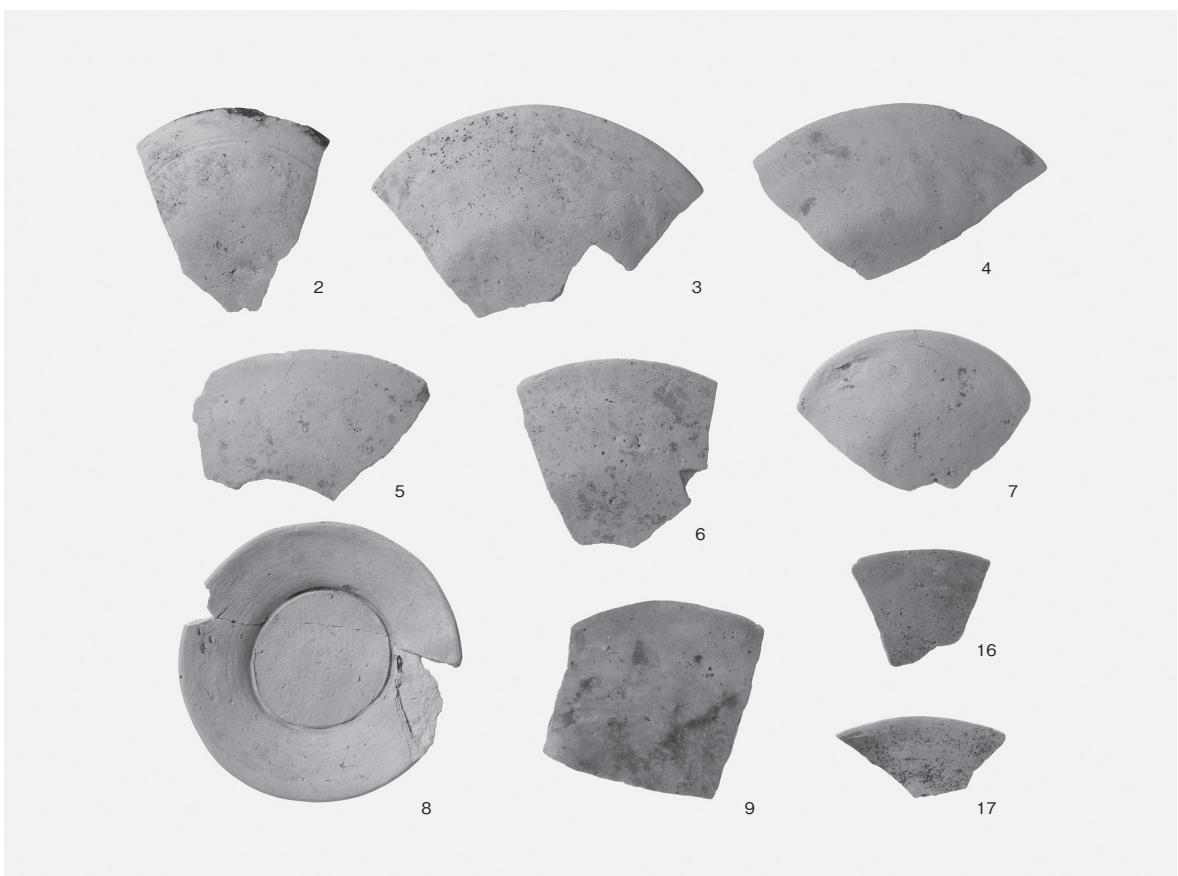
1. 溝50・57・柱穴72断面（西から）



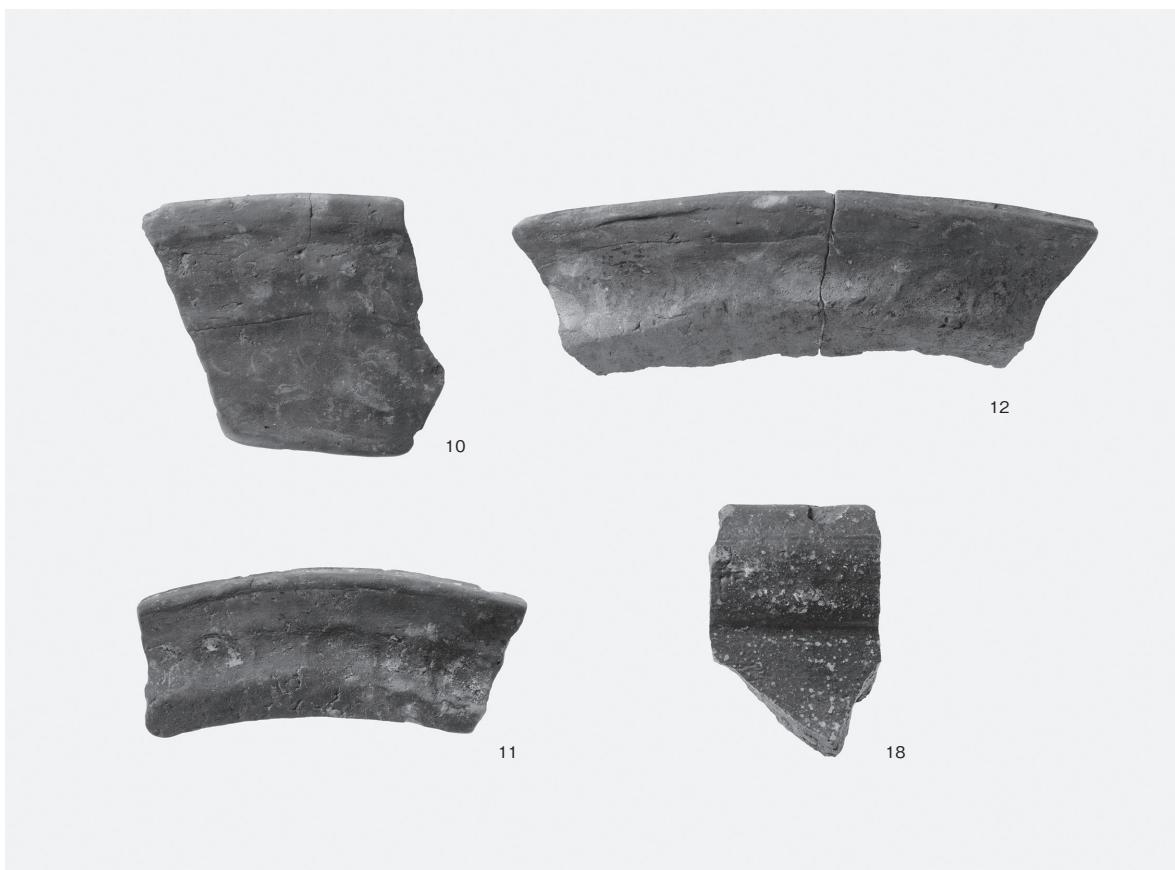
2. 第5層完掘状況（西から）



1. 遺構検出中出土遺物（瓦質土器・奈良火鉢）



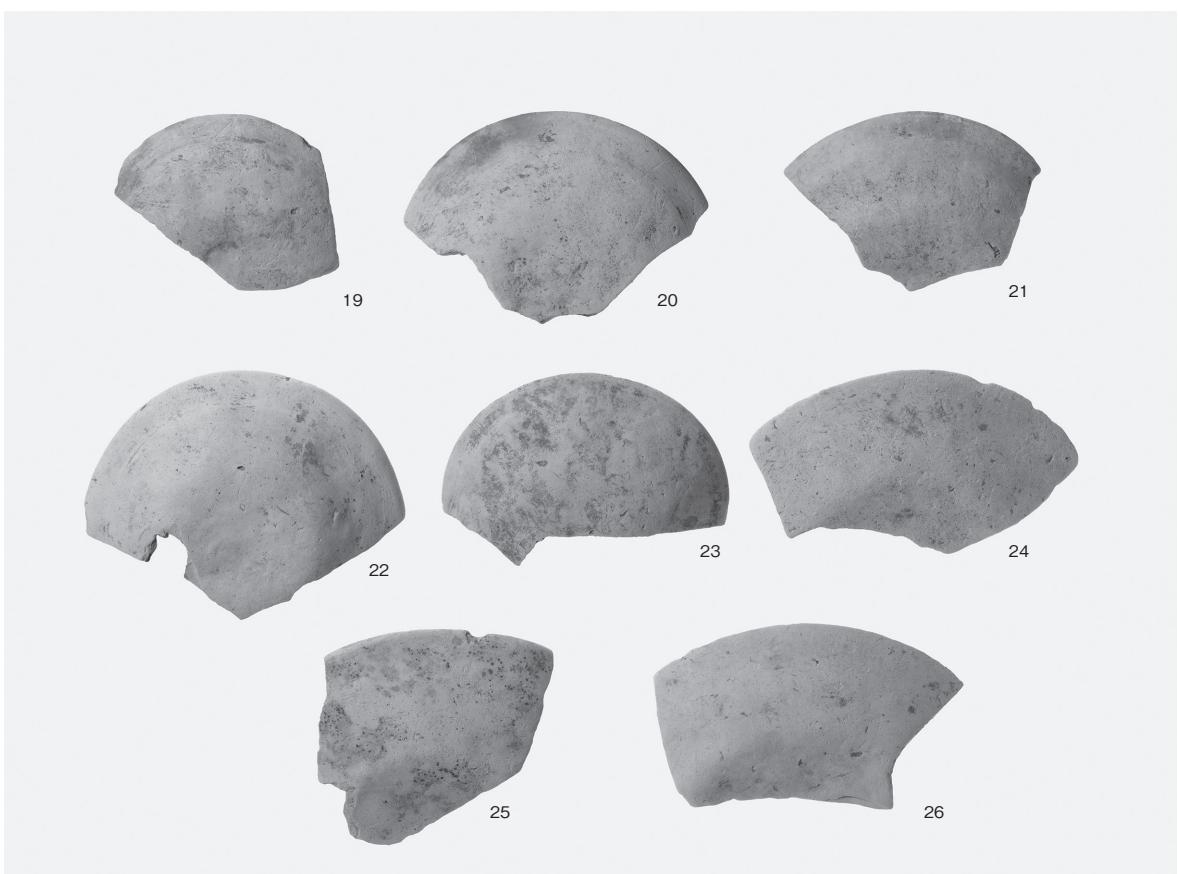
2. 土坑02・11・17・20・32出土遺物（土器・皿）



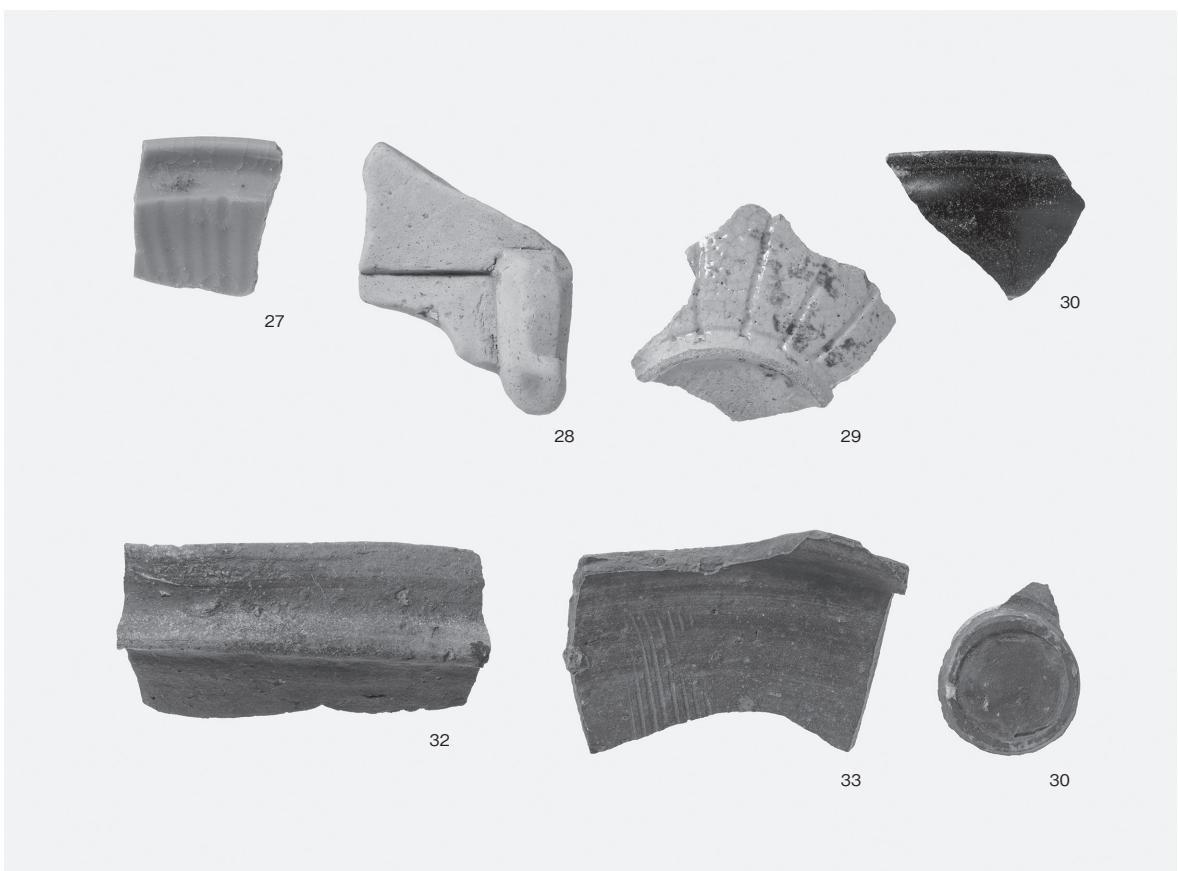
1. 土坑21・32出土遺物（土師器・鍋 燃締陶器・甕）



2. 土坑21出土遺物（土師器・鍋）



1. 溝13出土遺物（土師器・皿）



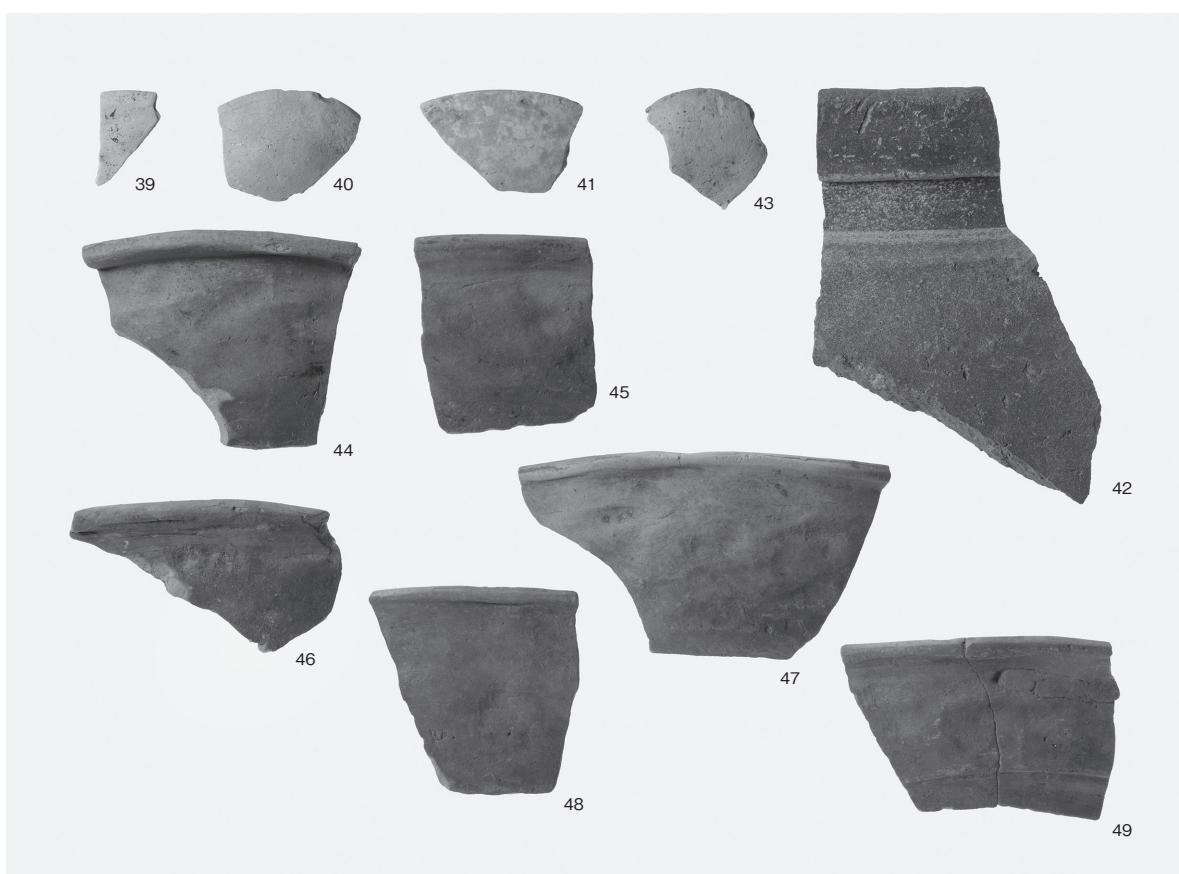
2. 溝13出土遺物（青磁・皿 瓦質土器・鉢 施釉陶器・皿・天目茶椀 焼締陶器・すり鉢）



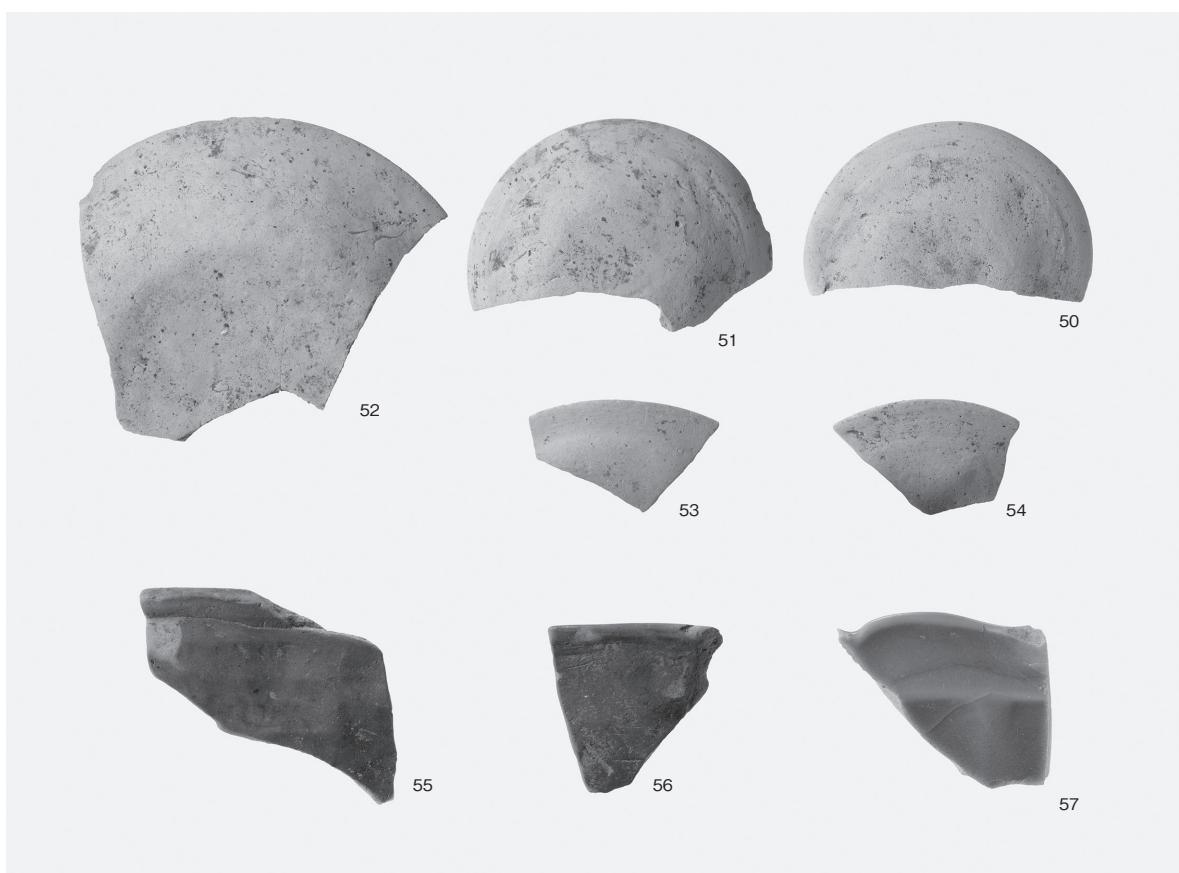
1. 溝13出土遺物（焼締陶器・壺 石鍋）



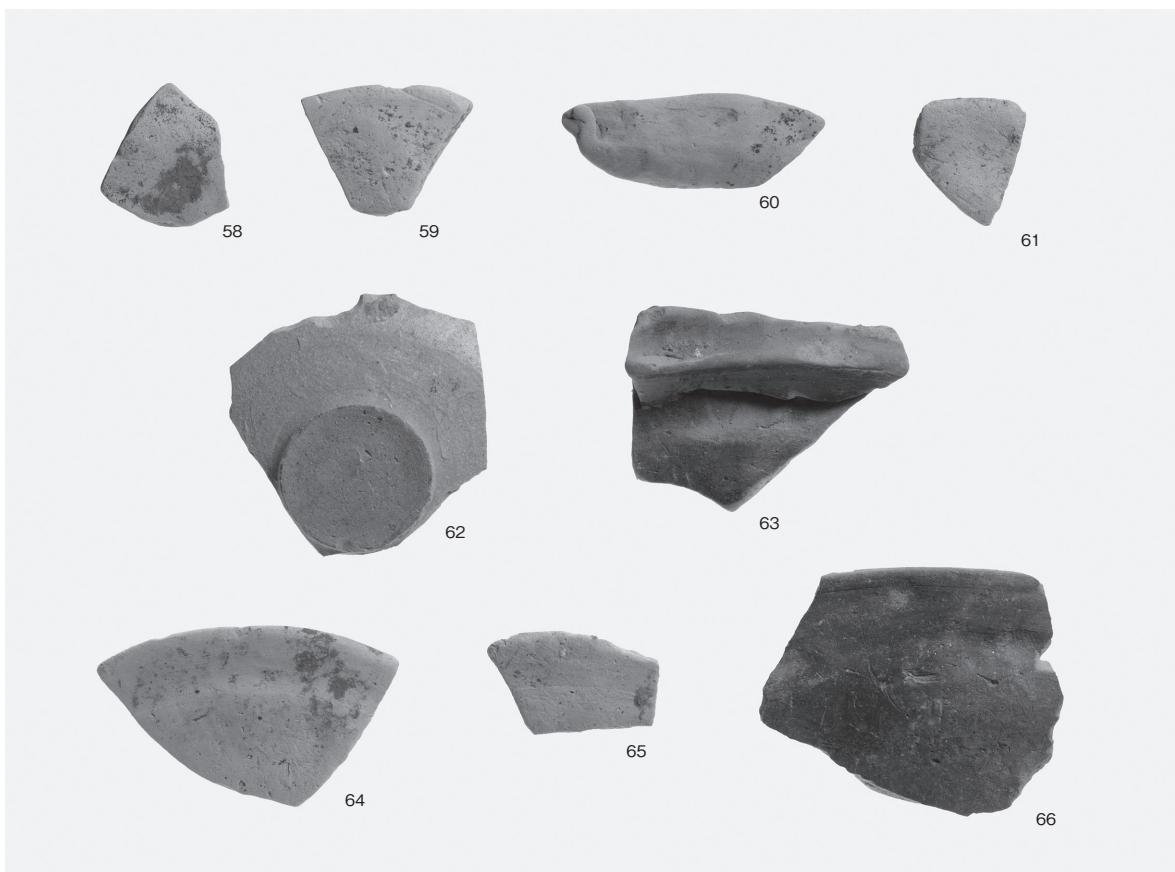
2. 風倒木痕・第4層内出土遺物（土師器・皿）



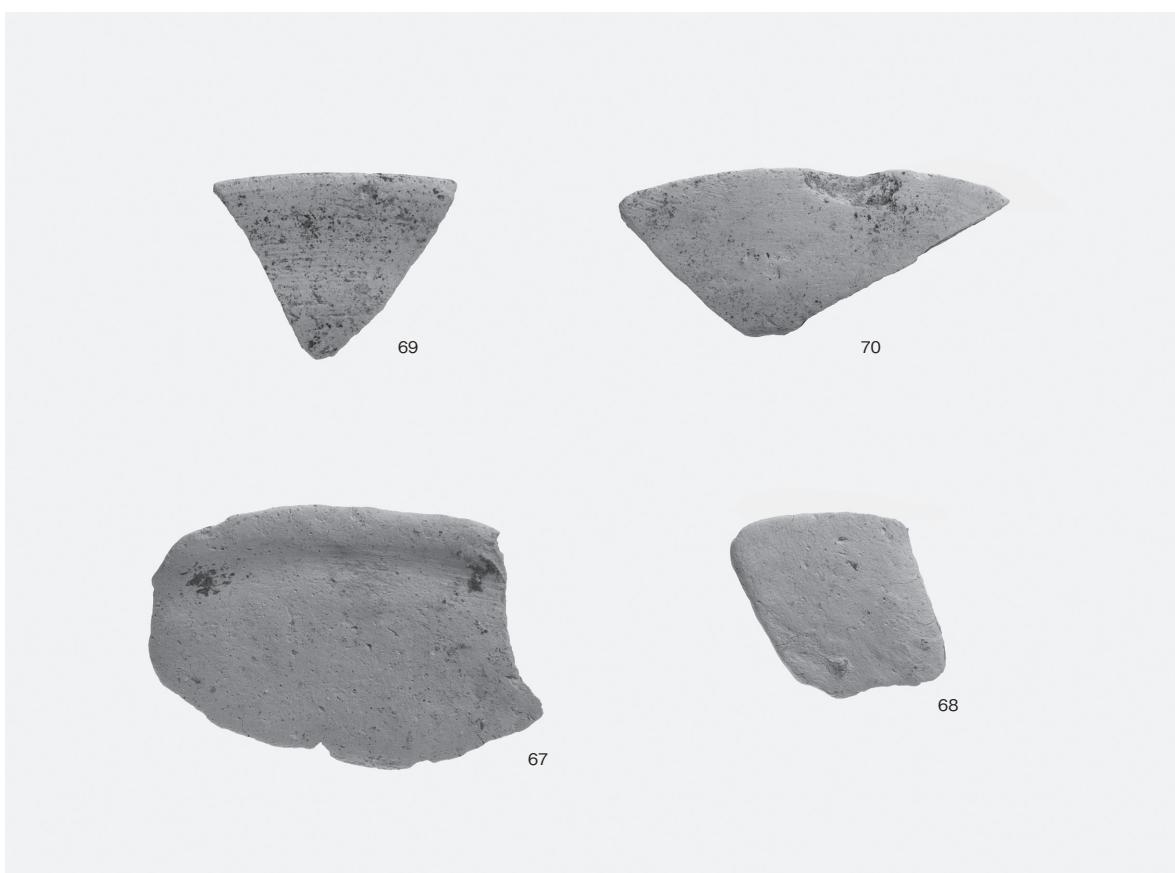
1. 土坑34・54・63・64・66出土遺物（土師器・皿・鍋 焼締陶器・甕）



2. 溝50・57出土遺物（土師器・皿・鍋 青磁・皿）



1. 柱穴38・42・56・76（柱列86）・柱穴75（柱列87）・柱穴72（柱列88）出土遺物
(土師器・皿・鍋 灰釉陶器・皿)



2. 柱穴29・31・46・49出土遺物（土師器・皿）

報告書抄録

ふりがな	かみぎょういせき・てらのうちきゅういきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	上京遺跡・寺ノ内旧域発掘調査報告書							
シリーズ名	文化財サービス発掘調査報告書							
シリーズ番号	第23集							
編著者名	田邊貴教 吉川絵里							
編集機関	株式会社 文化財サービス							
所在地	〒612-8372 京都市伏見区北端町58							
発行所	株式会社 文化財サービス							
発行年月日	2022年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみぎょういせき・ 上京遺跡・ てらのうちきゅういき 寺ノ内旧域	きょうとしかみぎょうく 京都市上京区 てらのうちとおりしんまち 寺之内通新町 にしいみょうけんじまえちょう 西入妙顕寺前町 ばんち 515番地14	26100	224 168	35度 02分 09秒	135度 45分 19秒	2022年 1月5日 ～ 2022年 1月27日	135 m ²	集合住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上京遺跡・ 寺ノ内旧域	都城跡 寺院跡	江戸時代	土坑	土師器 染付 施釉陶器 焼締陶器 瓦	江戸時代の廃棄土坑、室町後期から末期の溝・土取り穴、室町後期の堀跡と思われる溝・柱列・土坑を検出した。本調査地			
		室町時代後期～ 末期	土坑 溝 柱列 柱穴	土師器 瓦質土器 施釉陶器 焼締陶器 青磁 白磁 石製品	は町田本洛中洛外図に描かれた大心院の推定地であり、布堀り基礎堀から掘立柱堀への作り替え、堀が失われた後の境界の溝、天正12年の豊臣秀吉の妙顕寺移転の際の整地による埋没までの変遷を辿ることができた。			

文化財サービス発掘調査報告書 第23集
上京遺跡・寺ノ内旧域
発掘調査報告書

発行日 2022年3月31日

株式会社 文化財サービス
編 集 〒612-8372 京都市伏見区北端町58
TEL 075-611-5800

三星商事印刷株式会社
印 刷 〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る
TEL 075-256-0961